河南町文化財調査報告書　第8集

群田遺跡

平成5年3月

宮城県 河南町教育委員会

群田遺跡

発　刊　の　辞

河南町北村青木部落の裏蔭に、群田という地名があります。今は人家１軒もなく、人里離れていますが、昔は１、２軒家があったと伝えられ、遺跡となっていました。

そこへ平成３年度石巻地区広域行政事務組合施行の、衛生センター建設の話が持上がりました。

やはりそのような施設は、人里離れたところがよい、というわけでしょう。

となると「開発行為」であり、遺跡については、文化財調査が必要となり、当教育委員会の仕事となります。

発掘調査専門職の資格を有する中野裕平主事が、担当して約９ヶ月間の調査に取組みました。

地元から作業員の協力を得て、地道な調査が続けられました。

その結果、古代の住居跡、そして近世期の実年代のわかる資料が発見されました。

伝えの通り、嘗て人家のあったところが、ハッキリしたわけであります。その当時の人の生活ぶりがわかり、歴史を知る上で貴重な発見となりました。

現在、河南町では、文化財発掘調査が、数ヶ所行われています。従って専門調査員は、寧日ない多忙の毎日を続けています。

今回漸く群田遺跡発掘調査の結果表(記録書)がまとまりました。

時間が余計かかりましたが、調査員の多忙等の故と御容赦下さい。

調査に御協力いただきました作業員その他各位に厚く御礼申し上げて、発刊の辞といたします。

平成５年３月

河南町教育委員会　教育長　浅　野　鐵　雄

例　　言

1．本書は、衛生センター建設（更新）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として実施された調査の報告書である。

2．発掘調査は、次の要項で実施した。

〔遺　跡　名〕 群田遺跡(遺跡番号：69049)

〔所　在　地〕 宮城県桃生郡河南町北村字群田51番地の1

〔調査対象面積〕 15,000㎡(調査面積：9,730㎡)

〔調 査 期 間〕 平成3年11月27日～平成3年12月27日(確認調査)

平成4年2月24日～平成4年3月31日(確認調査及び一部事前調査)

平成4年4月7日～平成4年8月28日(事前調査)

〔調 査 主 体〕 河南町教育委員会

〔調　査　員〕 河南町教育委員会社会教育課　主事　中野裕平

3．調 査 指 導 ： 宮城県教育庁文化財保護課

4．発掘調査と報告書作成に当り次の方々から指導・協力をいただいた(敬称略)。

〔発 掘 調 査〕 宮城県教育庁文化財保護課：小井川和夫、加藤道男、佐藤則之

東北歴史資料館：阿部博志

宮城県河南高等学校：相原淳一

河南町青木行政連絡区長：遠藤哲夫

〔報告書作成〕 宮城県多賀城跡調査研究所：進藤秋輝、丹羽茂、真山悟、村田晃一

仙台市教育委員会：佐藤洋

多賀城市埋蔵文化財調査センター：石川俊英、千葉孝弥

盛岡市教育委員会：八木光則、小原俊巳

雄勝硯生産販売協同組合：高橋寅一

宮崎町ふるさと陶芸館：畠山静子

福島県鹿島町歴史民俗資料館：佐藤友之

5．本遺跡より出土した金属製品の保存処理については、東北歴史資料館 梅村聖一氏の協力をいただいた。

6．調査・整理参加者：石川秋治、伊藤とも子、伊藤ゆう子、遠藤英子、遠藤恒彦、及川元子、小国清、勝又くに子、加藤きわ子、加藤次男、鹿野竹二郎、今野親夫、今野はな子、斎田強、斉藤富士子、鈴木よみ子、高橋吉雄、高橋正、中塩栄子、米谷京子、三浦真太郎、三浦富子、門馬忠雄、山田盛、渡辺洋

宮城県河南高等学校人文科学部

7．土層の色調表記については、『新版標準土色帖』7版(小山・竹原：1987.1，日本色研事業株式会社)に準拠し、土性区分は国際土壌学会法の基準を参考にした。

8．本書の執筆・編集は、河南町教育委員会社会教育課　主事　中野裕平が担当した。

9．出土した遺物は、全て河南町教育委員会が保管している。

目　　次

発刊の辞
例　　言
目　　次
Ⅰ．遺跡の位置と環境 …… 1
　1．遺跡の位置と地理的環境 …… 1
　2．遺跡の歴史的環境 …… 1
Ⅱ．調査経過 …… 6
　1．調査に至る経過 …… 6
　2．調査の方法と経過 …… 7
Ⅲ．基本層序 …… 10
Ⅳ．検出された遺構と出土遺物 …… 11
　1．住居跡 …… 11
　2．竪穴遺構 …… 17
　3．井戸跡 …… 24
　4．土　壙 …… 26
　5．焼土遺構 …… 30
　6．溝　跡 …… 33
　7．その他の遺構と出土遺物 …… 38
Ⅴ．考察とまとめ …… 44
　1．遺物と遺構 …… 44
　2．まとめ …… 51
引用・参考文献 …… 52
写真図版 …… 54

Ⅰ．遺跡の位置と環境

1．遺跡の位置と地理的環境

群田遺跡は、宮城県桃生郡河南町北村字群田地内に所在し、ＪＲ石巻線前谷地駅の南方約6㎞にある。遺跡の所在する河南町は面積69.33㎢、人口18,441人(平成4年12月31日現在)の町で、宮城県の東部に位置し、石巻市の北西、矢本町の北方に隣接する。旧北上川は町の北部で江合川に合流し、町の北部及び東部を区画しながら石巻湾に注いでいる。

東に標高60～90ｍの通称須江丘陵、西に箟岳丘陵からつづく標高70～170ｍの通称旭山丘陵、北に最高所173ｍの和渕山とこれに連なる丘陵を配している。町の中央部には低坦地があり、江戸時代には用水確保のため広渕沼が造られたが、大正10年から昭和3年にかけて干拓され水田地帯となっている。

旭山丘陵は、旭山撓曲と大塩背斜からなり、173.8ｍの旭山を最高所とする。丘陵の西側半分を構成する大塩背斜の一画に、本遺跡は位置する。現況の大部分は杉や雑木の山林で、他に僅かの畑地や水田からなる。

本遺跡は、細粒砂岩・中～粗粒砂岩・礫岩からなる中新統：三ッ谷層下部層が基盤をなし、その上に砂岩・シルト岩・礫岩からなる鮮新統：亀岡層、シルト岩・砂質シルト岩からなる同：竜ノ口層、さらに最上部には砂岩・シルト岩・礫岩・凝灰岩からなる同：表沢層の堆積がみられる(石井・柳沢ほか：1982)。

2．遺跡の歴史的環境

町内には、群田遺跡の所在する旭山丘陵や須江丘陵などの丘陵部を中心に、多数の遺跡が分布している。これらの遺跡について、時代別にふれてみたい。

旧石器時代の遺跡は、現在のところ発見されていない。

縄文時代の遺跡は23ヶ所確認されている。この中で、型式名のわかる土器を出土しているのは9遺跡である。桑柄貝塚はカキを主体とした鹹水産貝塚であり、前期(上川名Ⅱ式、大木1式)の遺物を包含する。関ノ入遺跡では、前期(大木2式)、中期(大木8ａ式)、後期の遺物が出土している。朝日貝塚はヤマトシジミを主体とした汽水産貝塚であり、中期(大木7b、8a、8b式)の遺物を包含する(藤沼・小井川ほか：1989.3)。小崎遺跡からは、中期(大木8、9式)、後期、晩期の遺物が採集されている。須江糠塚遺跡からは、中期(大木9式)の遺物が出土している(高橋・阿部：1987.3)。宝ヶ峯遺跡は、縄文時代後期の土器型式「宝ヶ峯式」の標式遺跡として、学

史的にも有名である(伊東信雄：1957.3、松本彦七郎：1919.5、1919.9)。ここでは中期、後期(南境式、宝ヶ峯式、金剛寺式)、晩期(大洞B、BC、C1式)の遺物が出土している。俵庭遺跡からは、後期(南境式)の遺物が採集されている。代官山遺跡からも後期(南境式)の遺物が出土している。大田沢遺跡からは、晩期(大洞BC式)の遺物が採集されている。他に前山遺跡、前山B遺跡、前山C遺跡、箱清水寺脇遺跡等があり、その多くは、旭山丘陵の麓部で平坦地に接する縁辺や沢をやや入った所に広がる平坦部や緩斜面に立地している。しかし、その性格は、貝塚以外の多くは不明といわざるをえない。

弥生時代の遺跡は2ヶ所確認されている。本鹿又遺跡では旧北上川の河床から中期(大泉式)の遺物が採集されている。俵庭遺跡では土器は採集されていないが、アメリカ式石鏃が採集されている。

古墳時代の遺跡は7ヶ所確認されている。須江糠塚遺跡では前期(塩釜式期)の住居跡が7軒検出されている。いずれも方形を基調とするもので、丘陵尾根上の平坦面に立地している。関ノ入遺跡でも前期(塩釜式期)の住居跡が1軒検出されている。新田A遺跡では前期(塩釜式)の土器が採集されている。[註1] 鷺の巣遺跡でも前期(塩釜式)の土器が採集されている。後期では、代官山横穴古墳群の存在が確認されている。他に群田遺跡、高森山遺跡がある。

奈良・平安時代の遺跡は23ヶ所確認されている。群田遺跡では、平安時代前半の住居跡3軒、竪穴遺構7基が検出されている。須江丘陵では、丘陵の北から南まで窯跡が分布している。昭和62年度から調査が行われている関ノ入遺跡では、奈良時代と平安時代前半の竪穴住居跡42軒(国分寺下層式期13軒、表杉ノ入式期21軒、不明9軒)、9世紀初頭から10世紀前半にかけての窯跡27基、粘土採掘坑跡6基などが検出されている。また、昭和61年度に調査された須江糠塚遺跡からは、奈良時代後半から平安時代初期にかけての住居跡9軒、9世紀後半から10世紀前半にかけての窯跡6基が検出されている。須江瓦山窯跡には奈良・平安時代の瓦や須恵器を生産した窯跡群がある。瓦の一部は、牡鹿郡衙あるいは牡鹿柵跡と推定される矢本町赤井遺跡に供給されている(三宅・進藤・茂木：1987.3)。平成3年度の調査では土壙29基、焼土遺構1基が検出されている。土壙の中には、粘土採掘坑跡と推定されるものが11基、須恵器甕を横位に埋設したものが1基あった。平成3年度に調査された代官山遺跡からは、8世紀中葉～後半頃と10世紀前半の窯跡、8世紀末～9世紀初頭頃の住居跡1軒が検出されている(平成3年度宮城県発掘調査遺跡発表会資料：1991.12、第18回古代城柵官衙遺跡検討会資料：1992.2)。太田沢遺跡、前山C遺跡では、9世紀代の土師器が採集されている。他に小崎遺跡、細田遺跡等がある。

中世以降になると、旭山や須江の丘陵上など14箇所に城館が築造されている。長者館跡(長者平遺跡)は、金売吉次の仮屋敷跡(藩政期には小島嘉右衛門の除屋敷跡とも言われる)の言い伝えがある。 糠塚館跡(須江糠塚遺跡)は、古代の「中山柵跡」に擬定されたこともあり(清水東四郎：

No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	須江糠塚遺跡（糠塚館跡）	集落跡 窯跡、城館	縄文(中)、古墳、奈良・平安、中世	25	前山遺跡	包含地	縄文、奈良・平安
2	須江瓦山窯跡	窯跡	奈良・平安	26	黒沢A遺跡	包含地	縄文、古代
3	池袋囲遺跡	包含地		27	黒沢B遺跡	包含地	縄文、古代
4	広渕沼遺跡	包含地		28	箱清水A遺跡	包含地	縄文(後)、古代
5	宝ヶ峯遺跡	包含地 貝塚	縄文(中～晩)、奈良・平安	29	箱清水B遺跡	包含地	縄文、古代
6	朝日貝塚	貝塚	縄文(中)	30	箱清水寺脇遺跡	包含地	縄文
7	本鹿又遺跡	包含地	弥生	31	小友遺跡	包含地	古代
8	桑柄貝塚	貝塚	縄文(前)	32	高森山遺跡	包含地	古墳、古代
9	塩野田城跡（塩煮田館）	城館	中世	33	大沢A遺跡	包含地	縄文、古代
10	宿屋敷跡	城館	中世	34	大沢B遺跡	包含地	縄文
11	要害館跡（館山館）	城館	中世	35	大沢C遺跡	包含地	縄文
12	武田館跡（武田屋敷）	城館	中世、近世	36	夷田館跡	城館	近世
13	柏木館跡	城館		37	代官山遺跡	包含地	縄文(後)、奈良・平安
14	小崎館跡	城館	近世	38	桑柄遺跡	包含地	古代
15	草田館跡（草田遺跡）	城館 包含地	縄文、中世	39	新田A遺跡	包含地	古墳、古代
16	喜多村館跡（高地谷館）	城館	中世	40	新田B遺跡	包含地	古代
17	青木館跡（林光館）	城館	中世	41	代官山横穴古墳群	横穴古墳	古墳、古代
18	新庄館跡（駒立館）	城館	中世	42	群田遺跡	集落跡	縄文、古墳、奈良・平安、江戸
19	駒場館跡	城館	中世	43	奈良山遺跡	窯跡	古代、江戸
20	俵庭遺跡	包含地	縄文(中・後)、弥生、古代	44	御塩蔵場跡	蔵跡	近世
21	長者館跡（長者平遺跡）	城館 包含地	縄文、古代、中世	45	細田遺跡	包含地	縄文、古代
22	関ノ入遺跡	集落跡 窯跡	縄文(前～後)、古墳、奈良・平安、中世	46	鷺の巣遺跡	包含地	古墳
23	小崎遺跡	包含地	縄文(中～晩)、奈良・平安	47	前山B遺跡	包含地	縄文、古代
24	大田沢遺跡	包含地	縄文(晩)、古代	48	前山C遺跡	集落跡	縄文(後・晩)、奈良・平安

第1表　遺跡地名表

河南町
桃生町
石巻市
石巻専修大学
新田町
河北町
南郷町
小船越
大森
三輪田
福村蛇田
高須賀
飯野
相野谷
和渕
赤井
広渕
前谷地
三軒谷地
(国土地理院 1：25,000を複製)

第１図　河南町の遺跡

1924.12、鈴木省三：1924.12)、「仙台領内古城書上」によれば、東西20間、南北16間の規模で、館主は須藤勘解由左衛門であるとされている(仙台叢書：1971)。塩野田城跡は東西21間、南北27間、城主は須藤勘解由左衛門(一説には矢代斎三郎)と伝えられている(「安永風土記」)。夷田館跡は、葛西氏家臣夷田氏の居館と伝えられている(「風土記御用書上」)。多くの城館跡は年代、館主共に不明である。

また、鹿又地区、須江地区を中心として、町内には、現在のところ88基の板碑が確認されている。紀年銘の判読できるものの中で最古は弘安元年(1278年)、最新は文明10年(1478年)のものである(佐藤雄一：1986.11)。残念ながら、多くの板碑は原位置を保っていない。中には、関ノ入遺跡出土の板碑のように、木炭窯の焚口等を強化するために折って側壁に貼り付けて使用されていた例もある。

江戸時代になると、新田開発や旧北上川や江合川の改修工事が行われ、舟運が盛んになる。平成２年度に調査された御塩蔵場跡では、基壇状遺構(上面：約400㎡)が検出されている(佐藤敏幸：1991.3)。他に一里塚跡、屋敷跡と考えられる群田遺跡、陶器を生産したと考えられる奈良山遺跡がある。

註１．採集された遺物の一部は、町教委が保管している。

Ⅱ．調査経過

１．調査に至る経過

石巻地区広域行政事務組合衛生センター(以下「衛生センター」)は、石巻地区１市９町のし尿処理を行う施設である。近年、施設の老朽化がすすんで、建て替えが望まれていた。そこへ、三陸縦貫自動車道石巻道路へのアクセス道路建設計画によって、道路が衛生センター敷地内の一部を通過することになり、現敷地内での建て替えが困難となった。そこで、平成元年２月、組合議会は衛生センターの移転を決め、河南町と河北町に分散配置を決定した。

これを受けて、同年７月、河南町議会議員全員協議会は北村地区に設置を決定し、北村字群田地内にその用地を求めた。この地は周知の埋蔵文化財包蔵地であったが、当時「矢返遺跡」という名称であったため、遺跡でないものとの誤解を受けることになった。このような錯誤を防ぐため、平成３年10月、河南町教育委員会は、「矢返遺跡」から「群田遺跡」へ名称を変更した。同年同月、河南町教育委員会は、石巻地区広域行政事務組合と協議に入った。同月、県文化財保護課の指導と協力を得て、衛生センター予定地内の踏査を行い、数地点で遺物を採集した。

しかしながら、遺跡の範囲、性格が十分に把握できる状況ではなかったため、同年11月、事

前調査に先駆けて確認調査を実施した。その成果を踏まえ、平成４年３月、河南町教育委員会は、記録保存を目的とする発掘調査を実施するための活動を開始した。

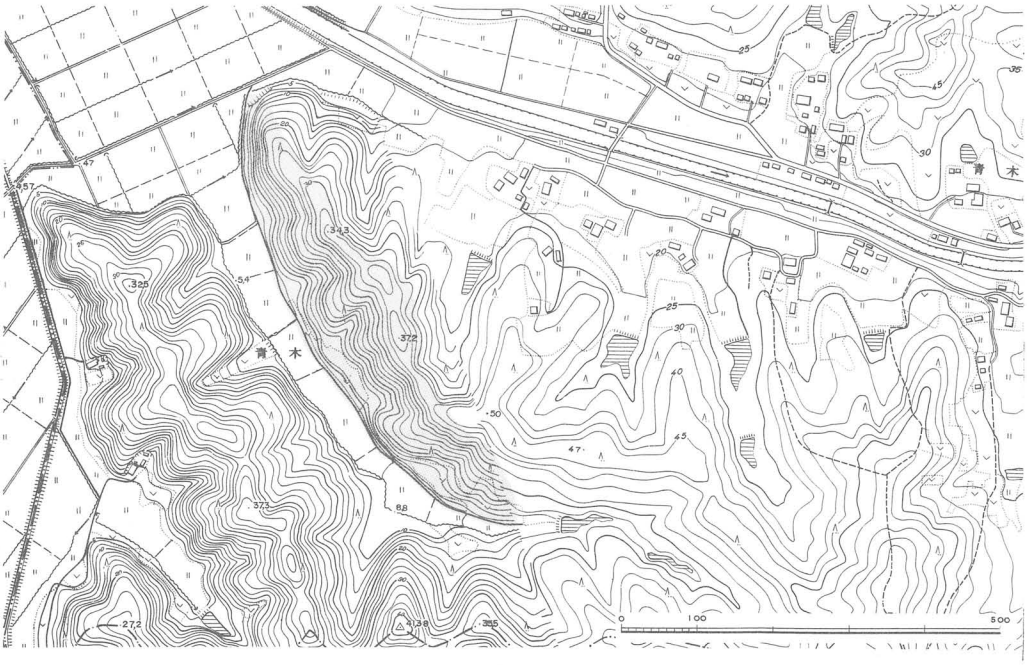
2．調査の方法と経過

今回の発掘調査は、分散配置する衛生センターの予定地(以下「調査区」)が『宮城県遺跡地図』(宮城県教育委員会：1988.1)登載の周知の埋蔵文化財包蔵地である群田遺跡の範囲内に所在するため、遺跡の立地する丘陵頂部平坦面及び斜面を対象として実施したものである。

確認調査は、基本的に東西軸または南北軸に則った３ｍ幅のトレンチを、３ｍの間隔をもって設定して、重機で表土除去を行い、遺構を確認した。

これによって、調査区内の遺構の分布が把握され、北側頂部平坦面及び南斜面、西斜面、南西部平坦面及び緩斜面に遺構が点在することが確認された。また、グリッドの設定、表記については、国家座標のＸ軸、Ｙ軸に基づいて、確認調査の原点を基に３ｍ単位で設定し、東西方向をアルファベット、南北方向をアラビア数字で表し、両者の組合せでグリッド名を表記した。

事前調査は調査区北側西斜面から開始し、頂部平坦面、南斜面、南西部平坦面と進めていった。効率的に調査を進めるため、遺構の点在する箇所の周辺の表土を地形を考慮しながら、重機を用いて除去し、遺構を確認した。その際、南西部平坦面につづく緩斜面の遺構の一部が南



第２図　調査区と周辺の地形

第３図　群田遺跡 遺構配置図

西部平坦面を構成する盛土に覆われていることが確認され、南西部平坦面の調査終了後、改めて南西部平坦面を構成する盛土を重機を用いて除去し、遺構を確認した。その結果、竪穴住居跡３軒、竪穴遺構７基、井戸跡１基、土壙９基、焼土遺構７基、溝跡４条、整地面、ピット群を検出した。

検出した遺構の実測図は、基本的に1/20図で作成し、３号・４号溝跡については1/40図を併用して作成した。

発掘調査は、平成３年11月27日から確認調査を開始し、同年12月27日に一時中断した。平成４年２月24日に再開し、確認調査及び一部事前調査を実施した。同年３月31日に再度一時中断し、同年４月７日に事前調査を再開した。遺物の水洗等、現場でも行える整理作業を併行しながら、同年８月28日までに遺構の平面図・断面図、写真、遺構のダメ押し及び文章記録等の記録化を全て完了し、調査を終了した。

Ⅲ.基本層序

調査区は大きく丘陵頂部平坦面、急斜面、調査区南西部に広がる平坦面、緩斜面に分けられる。これらの各面の層序には多少の相違はあるものの、基本的には同一の層準を示している。

〔Ⅰ層〕褐(10ＹＲ4/4)色のシルトである。本遺跡の表土で、全域に分布する。粘性はなく、しまりに欠ける。層厚は、丘陵頂部平坦面では５～20㎝、緩斜面、急斜面では10～30㎝である。現況の大部分は山林である。少量の陶磁器、金属製品を含む。

〔Ⅱ層〕にぶい黄褐(10ＹＲ5/4～10ＹＲ4/3)色、暗褐(10ＹＲ3/3～10ＹＲ3/4)、黄褐(10ＹＲ5/6)色、褐(10ＹＲ4/4)色の混合した層で、シルトと砂質シルトからなる。盛土によって整地された面で、調査区南西部平坦面を形成する。層厚は、最大深120㎝である。少量の陶磁器、金属製品、石製品を含む。

〔Ⅲ層〕暗褐(10ＹＲ3/3～10ＹＲ3/4)色～黒褐(10ＹＲ2/20～10ＹＲ3/2)色のシルトである。調査区全域に分布し、層厚は丘陵頂部平坦面では10～20㎝、急斜面では10㎝～25㎝、緩斜面では10～40㎝である。一部の遺構が、本層上面で確認されている。少量の土師器、須恵器、土製品、金属製品を含む。

〔Ⅳ層〕黄褐(10ＹＲ5/6)色の砂質シルトである。本調査区の地山で、調査区全域に分布する。ほとんどの遺構は、本層上面で確認されている。

Ⅳ．検出された遺構と出土遺物

群田遺跡の発掘調査によって竪穴住居跡3軒、竪穴遺構7基、井戸跡1基、土壙9基、焼土遺構7基、溝跡4条・整地面、ピット群が検出された。これらの遺構に伴って、土器や土製品、陶器、磁器、石製品、金属製品などの遺物が出土した。

1．住　居　跡

竪穴住居跡は、調査区を南北に二分する沢に南面した斜面から1軒、南西部の緩斜面から2軒の計3軒検出した。

(1) 1号住居跡

〔確認面〕基本層序Ⅳ層から確認された。

〔重複・増改築〕認められない。

〔規模・平面形〕東隅を除いた北東壁及び北西壁の一部が検出された。その他の部分は検出されなかった。残存する北東壁、北西壁の幅はそれぞれ6.67m、2.61mである。長方形または正方形を基調とするものと推定される。

〔竪穴層位〕11層に大別される。いずれも自然堆積層である。この中で、層№9は灰白色火山灰層である。

〔壁〕基本層序Ⅳ層からなる。最も保存の良い北東壁では43cmの高さで残存している。床面から急な角度で立ち上がる。

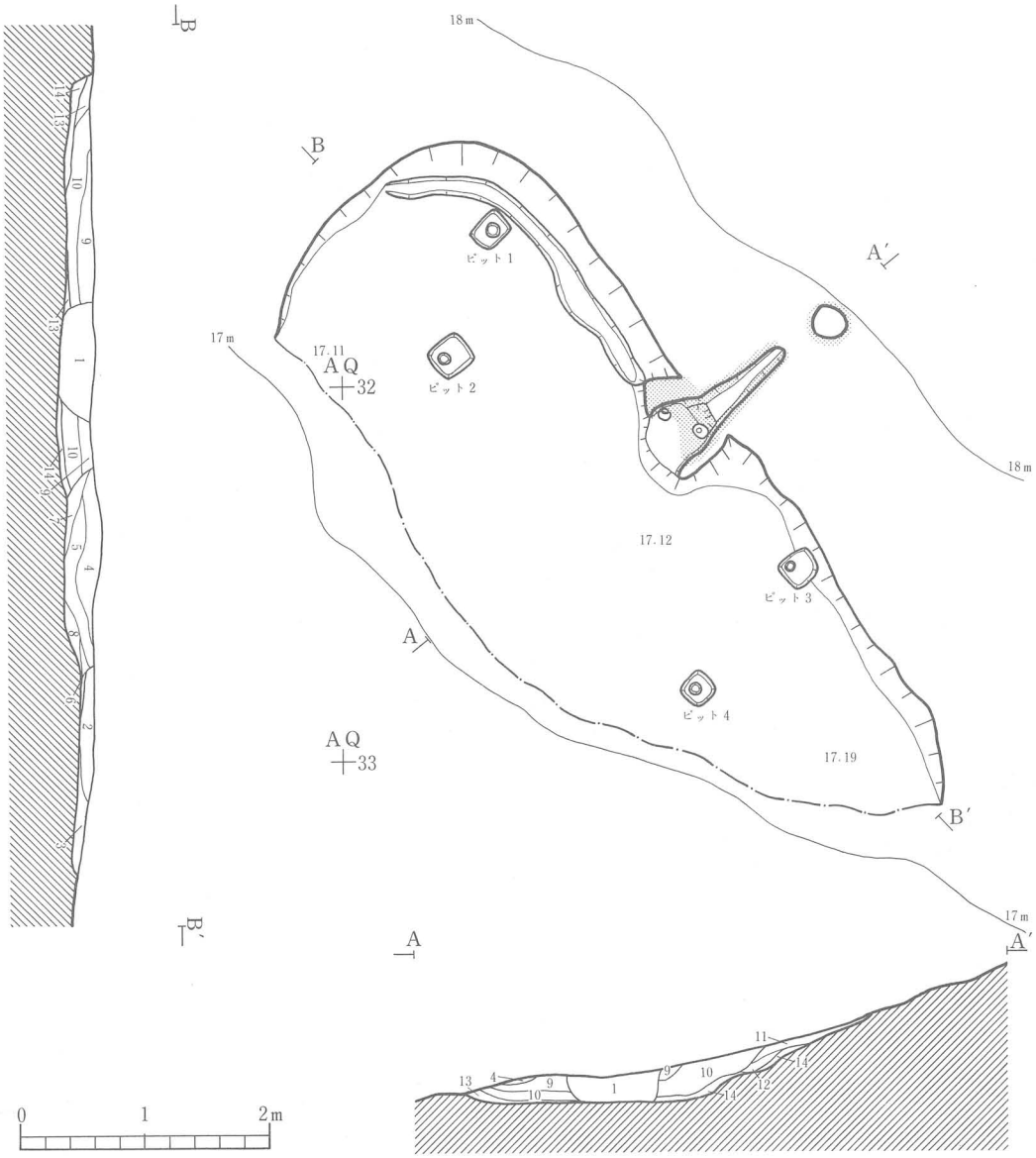
〔床面〕基本層序Ⅳ層を床面とする。残存する南東側の一画が、他の部分と比べて5～10cm高い。全体的にやや硬い。床面レベルは南東隅が最も高く、北西隅に向かうにつれてレベルを減じる。

〔柱穴〕4個のピットが検出された。隅丸長方形の掘り方を有し、全て柱穴である。

〔カマド〕北東壁に位置しており、燃焼部と煙道部が検出された。燃焼部は奥行き0.56

№	土　色	土　性	備　考	堆積範囲
1	暗褐10YR$^{3}/_{3}$	シルト	多量の灰白色火山灰を粒～塊状、少量の地山土を粒～塊状、炭化物を粒状に含。攪乱。	
2	暗褐10YR$^{3}/_{4}$	シルト	少量の炭化物を粒状に含。	竪穴1層
3	暗褐10YR$^{3}/_{3}$	シルト	少量の炭化物、地山土を粒状に含。	〃 2層
4	黒褐10YR$^{3}/_{2}$	シルト	少量の灰白色火山灰を粒～塊状、炭化物を粒状に含。	〃 3層
5	にぶい黄褐10YR$^{4}/_{3}$	砂質シルト	少量の炭化物、地山土を粒状に含。	〃 4層
6	褐10YR$^{4}/_{4}$	シルト	少量の炭化物を粒状に含。	〃 5層
7	褐10YR$^{4}/_{4}$	砂質シルト	少量の褐7.5YR$^{4}/_{3}$砂質シルトを塊状、炭化物、焼土、地山土を粒状に含。	〃 6層
8	黄褐10YR$^{5}/_{6}$	砂質シルト	粗砂含。少量の炭化物を粒状に含。	〃 6層
9	灰白2.5Y$^{8}/_{1}$	ローム	少量のにぶい黄褐10YR$^{4}/_{3}$シルトを粒～塊状に含。	〃 7層
10	暗褐10YR$^{3}/_{3}$	シルト	少量の炭化物を粒状、地山土を粒～塊状に含。	〃 8層
11	褐10YR$^{4}/_{4}$	砂質シルト	少量の炭化物、焼土を粒状に含。	カマド1
12	褐10YR$^{4}/_{4}$	砂質シルト	多量の灰白色火山灰を塊状、少量の炭化物、焼土を粒状に含。	〃 2
13	褐10YR$^{4}/_{4}$	シルト	少量の炭化物、焼土を粒状に含。	竪穴9層
14	褐10YR$^{4}/_{4}$	シルト	少量の炭化物を粒～塊状、地山土を粒状に含。	〃 9層

第2表　1号住居跡土層註記表



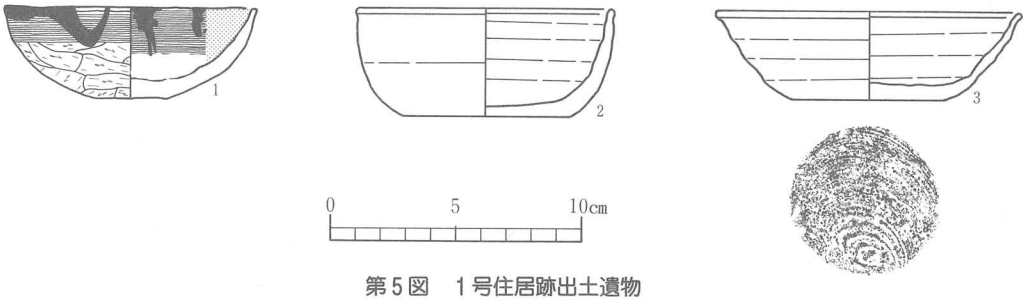
第4図　1号住居跡

m、幅0.80mである。煙道部は長さ1.33m、幅0.23mで、底面は先端に近づくにつれて高くなる。先端からは煙出しピットが検出された。堆積土は2層に細分され、下層には多量の灰白色火山灰が混入している。

〔周溝〕北東壁及び北西壁の一部から検出された。他の部分からは検出されず、検出状況からみて壁沿いに一周するものとは推定されない。幅18cm、深さ11cmで、断面は「U」形である。底面レベルは東隅が最も高く、北西隅に向かうにつれてレベルを減じる。

〔出土遺物〕カマド底面(層№12下)、床面(層№13下、14下)を中心に、土師器坏及び須恵器坏

の一括資料が出土した(第５図)。



第５図　１号住居跡出土遺物

No.	種　別	層　位	外　面	内　面	底　部	口径・底径・器高(cm)	備　考
1	土師器坏	床　面	口～体：ヨコナデ　体部：ケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	ケ　ズ　リ	10.0・2.8・3.6	燈明用。図版２－２－１
2	土師器坏	カマド底面	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラケズリ	10.3・6.5・4.3	図版２－２－２
3	須恵器坏	カマド底面	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	12.2・6.0・3.5	図版２－２－３

第３表　１号住居跡出土遺物

(2) 2 号住居跡

〔確認面〕 基本層序Ⅳ層から確認された。

〔重複・増改築〕 １号溝跡に切られている。

〔規模・平面形〕 北東壁の全部及び北西壁と南東壁の一部が検出された。その他の部分は検出されなかった。北東壁は幅4.00m、残存する北西壁及び南東壁の幅はそれぞれ2.83m、2.14mである。東西４m前後、南北4.00mの正方形を基調とするものと推定される。

〔竪穴層位〕 ２層に大別される。いずれも自然堆積層である。

〔壁〕 基本層序Ⅳ層からなる。最も保存の良い北東壁では32cmの高さで残存している。床面から急な角度で立ち上がる。

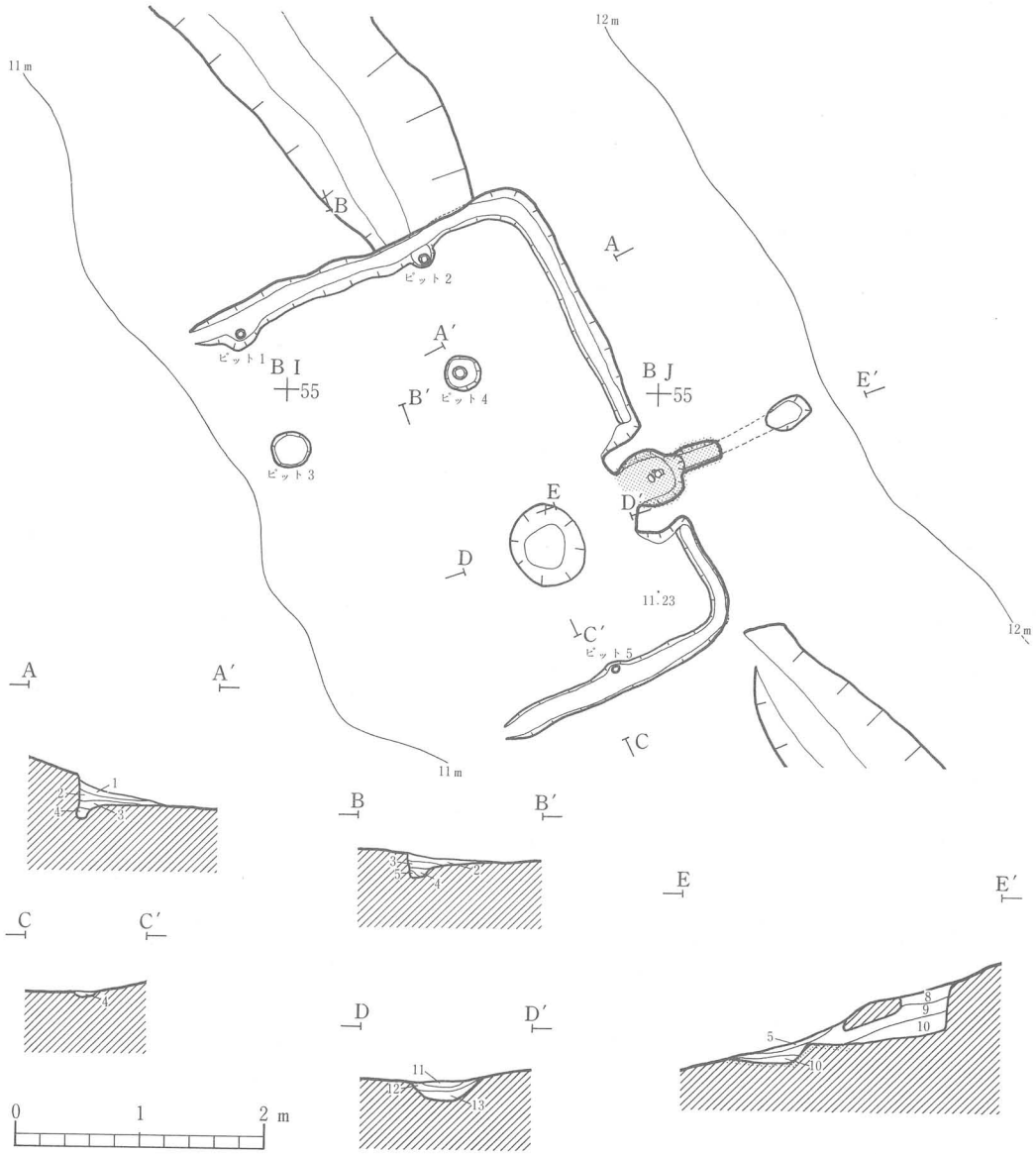
〔床面〕 基本層序Ⅳ層を床面とする。凹凸はない。西側が撹乱及び自然の削平を受けている。床面レベルは北東隅が最も高く、南西隅に向かうにつれてレベルを減じる。

〔柱穴〕 ５個のピットが検出された。ピット４は柱穴である。ピット１、２、５は側柱穴である。ピット３は柱穴ではない。

〔カマド〕 北東壁に位置しており、燃焼部と煙道部が

No.	土　色	土　性	備　考	堆積範囲
1	褐10YR4/4	シ　ル　ト	少量の炭化物、焼土、地山土を粒状に含。	竪穴１層
2	にぶい黄褐10YR4/3	シ　ル　ト	少量の炭化物、焼土を粒状、地山土を粒～塊状に含。	〃　２層
3	褐10YR4/4	シ　ル　ト	少量の焼土、地山土を粒状に含。	周　溝　１
4	黒褐10YR3/1	シ　ル　ト		〃　２
5	褐7.5YR4/3	シ　ル　ト	少量の炭化物、焼土を粒状に含。	カマド１
6	褐7.5YR4/6	シ　ル　ト	少量の炭化物を粒状、焼土を粒～塊状に含。	〃　２
7	赤褐５YR4/6	粘土質シルト	少量の炭化物を粒状、焼土を粒～塊状に含。	〃　３
8	にぶい黄褐10YR4/3	砂質シルト	少量の炭化物、焼土を粒状に含。	煙　道　１
9	黒褐10YR2/3	シ　ル　ト	少量の炭化物、焼土を粒状に含。	〃　２
10	黒褐10YR3/2	シ　ル　ト	少量の壁崩落土を塊状、炭化物、焼土、地山土を粒状に含。	〃　３
11	黄褐10YR5/6	シ　ル　ト	少量の炭化物を粒状、暗褐7.5YR3/3砂質シルトを粒～塊状に含。	貯　P　１
12	暗褐7.5YR3/3	砂質シルト	少量の炭化物、焼土、地山土を粒状に含。	〃　２
13	褐7.5YR4/4	シ　ル　ト	少量の炭化物を粒状、焼土を粒～塊状に含。	〃　３

第４表　２号住居跡土層註記表



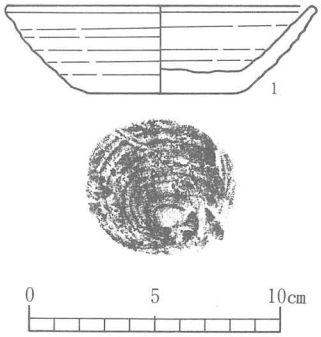
第6図　2号住居跡

検出された。燃焼部は奥行き0.53m、幅0.77mである。煙道部は基本層序Ⅳ層をトンネル状に構築されている。長さ1.11m、幅0.19mで、底面は先端に近づくにつれて高くなる。先端部からは煙出しピットが検出された。

〔貯蔵穴状ピット〕 1個検出された。長軸0.68m、短軸0.58mの不整円形を呈する。堆積土は3層(層№11、12、13)からなる。

〔周溝〕 壁と同様に全部は検出されなかったが、壁沿いに一周するものと推定される。幅23cm、深さ10cmで断面は「U」形である。底面レベルは北東側が最も高く、北西隅に向かうにつれてレベルを減じる。

〔出土遺物〕カマド底面、床面を中心に赤焼き土器坏、土師器甕が出土したが、図化できるものは少なかった。(第７図)。



第７図　２号住居跡出土遺物

No.	種　別	層　位	外　面	内　面	底　部	口径・底径・器高(cm)	備　考
1	赤焼き土器坏	カマド底面	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	10.6・5.6・3.4	図版４－２

第５表　２号住居跡出土遺物

(3) ３号住居跡

〔確認面〕基本層序Ⅲ層及びⅣ層から確認された。

〔重複・増改築〕３号竪穴遺構に切られ、５個のピットが重複している。

〔規模・平面形〕北東壁の全部及び北西壁と南東壁の一部が検出された。その他の部分は検出されなかった。北東壁の幅4.77m、残存する北西壁と南東壁の幅は、それぞれ4.40m、2.18mである。東西4.5m前後、南北4.77mのほぼ正方形を基調にするものと推定される。

〔竪穴層位〕３層に大別される。いずれも自然堆積層である。この中で、層No.２は少量の灰白色火山灰を混入している。

〔壁〕基本層序Ⅲ層及びⅣ層からなる。最も保存の良い北東壁では46cmの高さで残存している。床面から急な角度で立ち上がる。

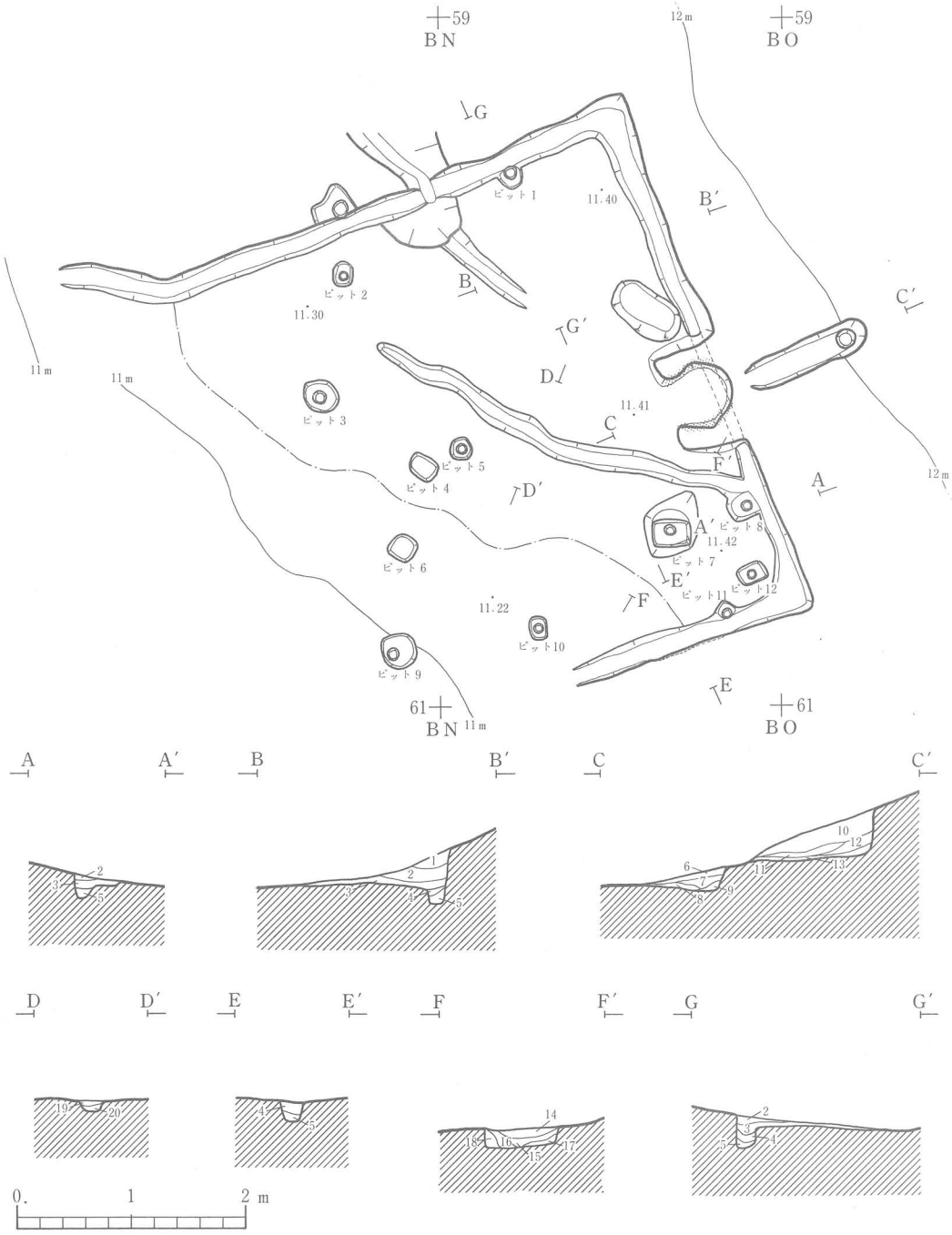
No.	土　色	土　性	備　考	堆積範囲
1	暗褐10YR3/3	シルト	少量の地山土を粒状に含。	竪穴１層
2	褐7.5YR4/3	シルト	少量の灰白色火山灰を塊状、炭化物、地山土を粒状に含。	〃２層
3	褐10YR4/4	シルト	少量の炭化物、地山土を粒状に含。	〃３層
4	黄褐10YR5/6	粘土質シルト	少量の炭化物を粒状に含。	周溝１
5	にぶい黄褐10YR5/3	砂質シルト	少量の炭化物、地山土を粒状に含。	〃２
6	褐10YR4/4	シルト	少量の炭化物、地山土を粒状に含。	カマド１
7	褐7.5YR4/3	シルト	少量の炭化物、地山土を粒状に含。	〃２
8	にぶい黄褐10YR4/3	シルト	少量の炭化物、焼土、地山土を粒状に含。	〃３
9	暗褐10YR3/4	シルト	少量の炭化物、地山土を粒状に含。	〃４
10	暗褐10YR3/4	シルト	少量の炭化物、地山土を粒状に含。	煙道１
11	暗褐10YR3/4	シルト	少量の地山土を粒状に含。	〃２
12	にぶい黄褐10YR4/3	シルト	少量の炭化物、地山土を粒状に含。	〃３
13	褐10YR4/4	シルト	少量の炭化物、地山土を粒状に含。	〃４
14	暗褐10YR3/4	シルト	少量の炭化物、地山土を粒状に含。	貯Ｐ１
15	にぶい黄褐10YR4/3	シルト	少量の炭化物を粒状、地山土を粒～塊状に含。	〃２
16	暗褐10YR3/4	シルト	少量の炭化物、地山土を粒状に含。	〃３
17	黄褐10YR5/6	粘土質シルト	少量の暗褐10YR3/4シルトを粒～塊状、炭化物を粒状に含。	〃４
18	黄褐10YR5/6	粘土質シルト	少量の灰白色火山灰を粒～塊状、炭化物を粒状に含。	〃５
19	にぶい黄褐10YR4/3	シルト	少量の灰白色火山灰を粒～塊状、炭化物を粒状に含。	内溝１
20	にぶい黄褐10YR4/3	シルト	少量の炭化物を粒状、地山土を粒～塊状に含。	〃２

第６表　３号住居跡土層註記表

〔床面〕基本層序Ⅲ層及びⅣ層を床面とする。凹凸はなく、貼床が施されている。床面レベルは北東隅が最も高く、南西隅に向かうにつれてレベルを減じる。

〔柱穴〕12個のピットが検出された。ピット２、５、７、９、10は柱穴である。この中で、ピット５、10の柱穴部分には灰白色火山灰が混入している。ピット１、８、11は側柱穴である。ピット３、12は掘り方に灰白色火山灰を混入しており、本遺構の柱穴ではない。ピット４、６は柱穴ではない。

〔カマド〕北東壁に位置しており、燃焼部と煙道部が検出された。燃焼部は奥行き0.61m、幅0.90mである。煙道部は基本層序Ⅳ層をトンネル状に構築されている。長さ1.11m、幅0.26m



で、底面は先端に近づくにつれて高くなる。先端からは煙出しピットが検出された。

〔貯蔵穴状ピット〕 1個検出された。長軸0.67m、短軸0.48mの不整円形を呈する。堆積土は5層(層№14～18)からなり、最下層には少量の灰白色火山灰が混入している。底面からはピット7が検出された。

〔周溝〕壁と同様に全部は検出されなかったが、壁沿いに一周するものと推定される。幅25cm、深さ18cmで、断面は「U」形である。底面レベルは南東隅が最も高く、北西隅に向かうにつれてレベルを減じる。なお、カマドの下はトンネル状に構築してある。

〔その他の施設〕周溝の北西隅から住居外へ向かって延びる溝が検出された。幅26cm、深さ11cmで、断面は「U」形である。住居を離れるにつれてレベルを減じる。また、カマドと住居南東隅の間から床面を北西に向かって延びる溝が検出された。幅23cm、深さ10cmで、断面は「U」形である。中間部が最も低く、両端に向かうにつれてレベルを増す。堆積土は2層(層№19、20)からなり、上層には少量の灰白色火山灰が混入している。

〔出土遺物〕カマド、貯蔵穴状ピットを中心に土師器甕、坏の破片が出土したが、図化できるものはなかった。

2．竪穴遺構

竪穴遺構は、調査区南西部の緩斜面から7基検出した。

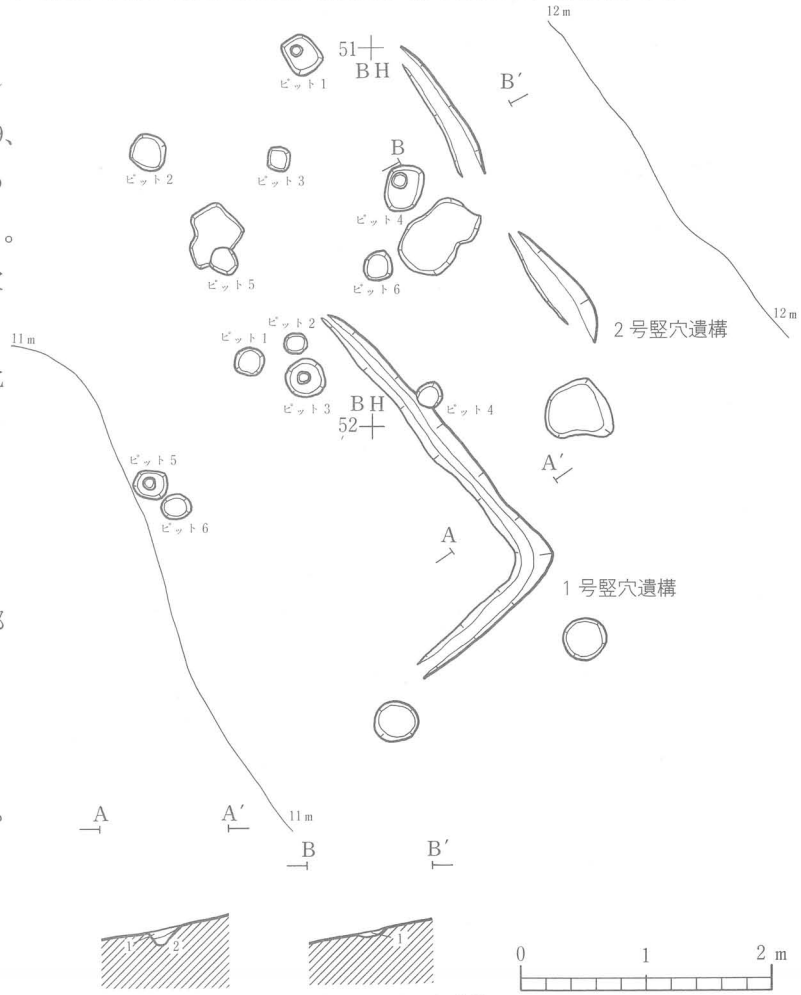
(1) 1号竪穴遺構

〔確認面〕基本層序Ⅳ層から確認された。

〔重複・増改築〕1個のピットが重複している。

〔規模・平面形〕北東壁及び南東壁の一部以外は削平を受けており、全体の規模は不明だが、方形を基調とするものと推定される。残存する北東壁及び南東壁の幅はそれぞれ2.67m、1.43mである。

〔竪穴層位〕2層に分けられる。いずれも自然



第9図　1号・2号竪穴遺構

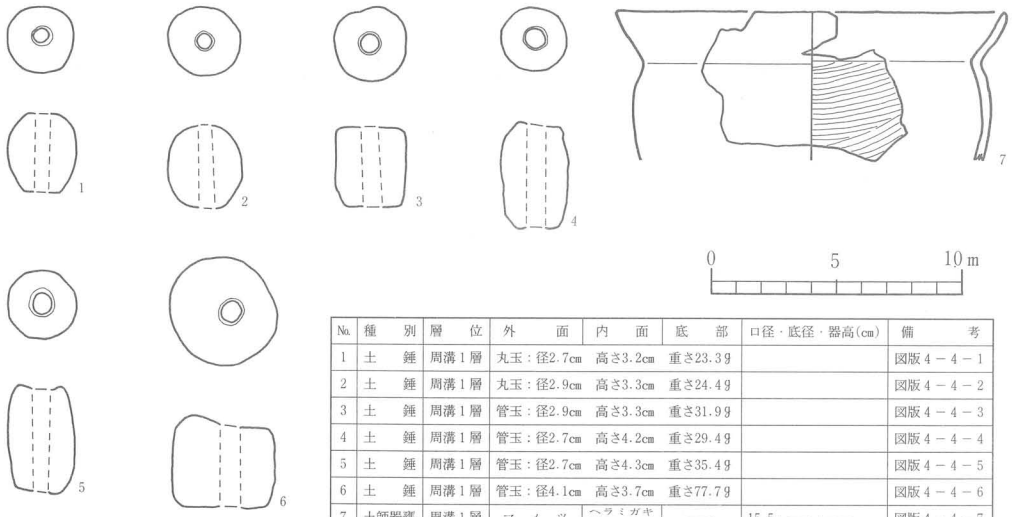
1号竪穴遺構

No.	土色	土性	備考	堆積範囲
1	暗褐10YR3/3	シルト	少量の炭化物を粒状に含。	周溝1層
2	黒褐10YR3/2	粘土質シルト	少量の炭化物、地山土を粒状に含。	〃 2層

2号竪穴遺構

No.	土色	土性	備考	堆積範囲
1	黒褐10YR2/3	シルト	少量の炭化物、地山土を粒状に含。	周溝1層

第7表　1号・2号竪穴遺構土層註記表



第10図　1号竪穴遺構出土遺物

No.	種　別	層　位	外　面	内　面	底　部	口径・底径・器高(cm)	備　考
1	土　錘	周溝1層	丸玉：径2.7cm　高さ3.2cm　重さ23.3g				図版4－4－1
2	土　錘	周溝1層	丸玉：径2.9cm　高さ3.3cm　重さ24.4g				図版4－4－2
3	土　錘	周溝1層	管玉：径2.9cm　高さ3.3cm　重さ31.9g				図版4－4－3
4	土　錘	周溝1層	管玉：径2.7cm　高さ4.2cm　重さ29.4g				図版4－4－4
5	土　錘	周溝1層	管玉：径2.7cm　高さ4.3cm　重さ35.4g				図版4－4－5
6	土　錘	周溝1層	管玉：径4.1cm　高さ3.7cm　重さ77.7g				図版4－4－6
7	土師器甕	周溝1層	マ　メ　ツ	ヘラミガキ 黒色処理	――	15.5・――・――	図版4－4－7

第8表　1号竪穴遺構出土遺物

堆積層である。

〔壁〕基本層序Ⅳ層からなる。最も保存の良い北東壁では13cmの高さで残存している。

〔床面〕基本層序Ⅳ層を床面とする。凹凸はなく、全体的にやや硬い。床面レベルは南東隅が最も高く、北西隅に向かうにつれてレベルを減じる。

〔柱穴〕6個のピットが検出された。ピット3、5は柱穴である。ピット1、2、4、6は本遺構の柱穴ではない。

〔周溝〕壁と同様に全部は検出されなかったが、壁沿いに一周するものと推定される。幅25cm、深さ9cmで、断面は「U」形である。底面レベルは北東側が最も高く、南西隅に向かうにつれてレベルを減じる。

〔出土遺物〕周溝から土師器甕、土錘が出土した(第10図)。

(2) 2号竪穴遺構

〔確認面〕基本層序Ⅳ層から確認された。

〔重複・増改築〕2個のピットが重複している。

〔規模・平面形〕北東側の周溝の一部以外は削平を受けており、全体の規模は不明だが、方形を基調とするものと推定される。残存する周溝の長さは2.80mである。

〔竪穴層位〕単層で自然堆積層である。

〔壁〕削平を受けており、確認されなかった。

〔床面〕基本層序Ⅳ層を床面とする。削平を受けており、使用時の面は損われている。

〔柱穴〕6個のピットが検出された。ピット1、4は柱穴である。ピット2、3、5、6は柱

穴ではない。

〔周溝〕北東側の一部が検出された。壁と同様に全部は検出されなかったが、壁沿いに一周するものと推定される。幅27cm、深さ6cmで、断面は「U」形である。底面レベルは北西隅が最も高く、南東隅に向かうにつれてレベルを減じる。

〔出土遺物〕周溝から土師器甕の破片が出土したが、図化できるものはなかった。

(3) 3号竪穴遺構

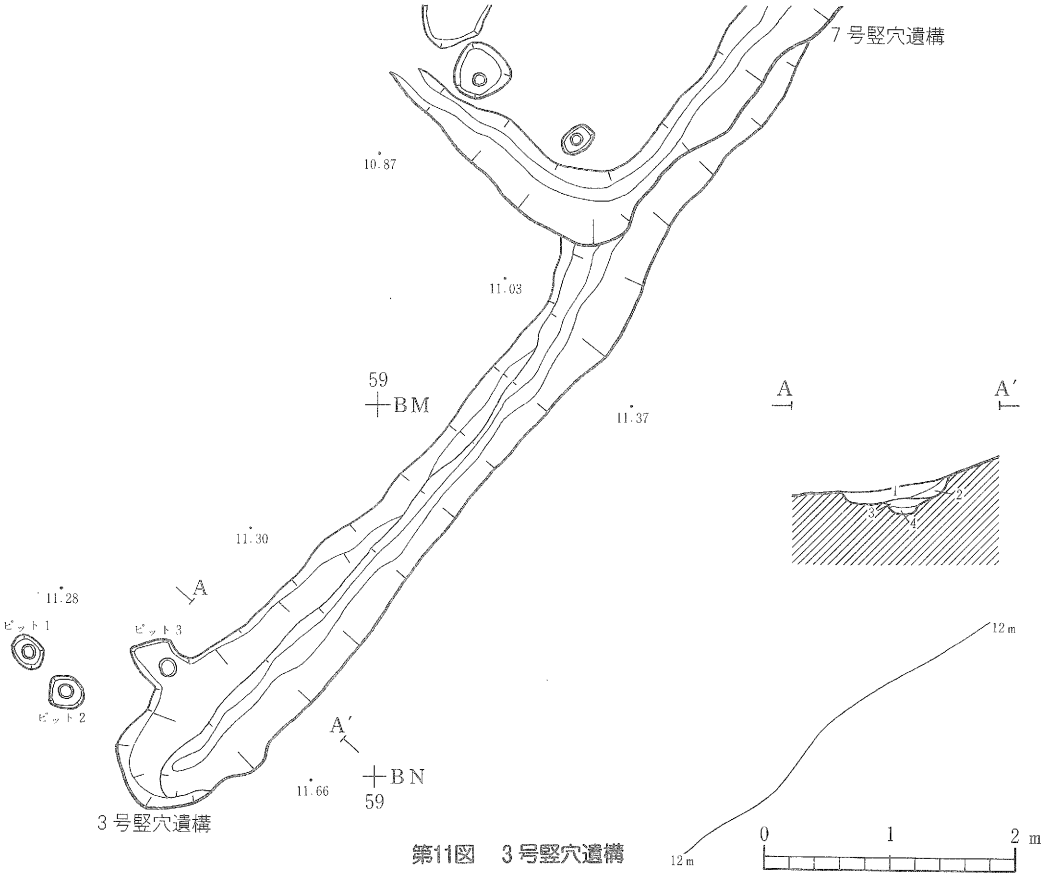
〔確認面〕基本層序Ⅳ層から確認された。

〔重複・増改築〕3号住居跡を切り、7号竪穴遺構に切られている。

〔規模・平面形〕南東壁の一部が検出された。その他の部分は検出されなかった。残存する南東壁の幅は8.11mである。全体の規模は不明だが、長方形または正方形を基調とするものと推定される。

〔竪穴層位〕2層に大別される。いずれも自然堆積層である。

〔壁〕基本層序Ⅳ層からなる。最も保存の良い南東壁では22cmの高さで残存している。床面か



第11図　3号竪穴遺構

ら急な角度で立ち上がる。

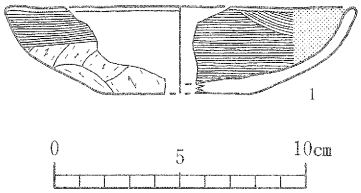
〔床面〕基本層序Ⅳ層を床面とする。周溝付近にくぼみがあり、全体的にやや硬い。残存する周溝付近を除いては大きく削平を受け、使用時の面は損われている。床面レベルは南東隅が最も高く、西隅に向かうにつれてレベルを減じる。

〔柱穴〕3個のピットが検出された。ピット1、3は柱穴である。ピット2は本遺構の柱穴ではない。

〔周溝〕南東壁の一部から検出された。他の部分からは検出されず、壁沿いに一周するものとは推定されない。幅53cm、深さ10cmで、断面は「U」形である。底面レベルは南隅が最も高く、東隅に向かうにつれてレベルを減じる。

No.	土色	土性	備考	堆積範囲
1	暗褐10YR$^{3}_{3}$	シルト	少量の炭化物、地山土を粒状に含。	竪穴1層
2	にぶい黄褐10YR$^{4}_{3}$	シルト	少量の地山土を粒～塊状に含。	〃 2層
3	暗灰黄2.5Y$^{4}_{2}$	シルト	少量の地山土を粒状に含。	周溝1層
4	にぶい黄褐10YR$^{4}_{3}$	シルト	少量の炭化物、地山土を粒状に含。	〃 2層

第9表　3号竪穴遺構土層註記表



No.	種別	層位	外面	内面	底部	口径・底径・器高(cm)	備考
1	土師器坏	1層	ヨコナデ ケズリ	ナデ・黒色処理	――	(14.0)・(6.0)・3.4	

第12図　3号竪穴遺構出土遺物

〔出土遺物〕堆積土及び床面、周溝から土師器坏及び甕の破片が出土した。図化できるものは少なかった(第12図)。

(4) 4号竪穴遺構

〔確認面〕基本層序Ⅳ層から確認された。

〔重複・増改築〕認められない。

〔規模・平面形〕北東側及び南東側の周溝の一部を除いては削平を受けており、全体の規模は不明だが、柱穴の位置から、東西3.5m以上、南北9m以上の長方形を基調とするものと推定される。

〔竪穴層位〕2層に細分される。いずれも自然堆積層である。

〔壁〕削平を受けており、確認されなかった。

〔床面〕基本層序Ⅳ層を床面とする。凹凸はなく、全体的にやや硬い。残存する周溝付近を除いては大きく削平を受け、使用時の面は損われている。床面レベルは南東隅が最も高く、北西隅に向かうにつれてレベルを減じる。

〔柱穴〕11個のピットが検出された。ピット1、3、6～9、11は柱穴である。それぞれの柱穴間の間隔は東西2.3～2.7m、南北2.3～2.8mである。ピット6の西側に組む柱穴は検出されなかった。掘り方の平面形は、上端では長方形または

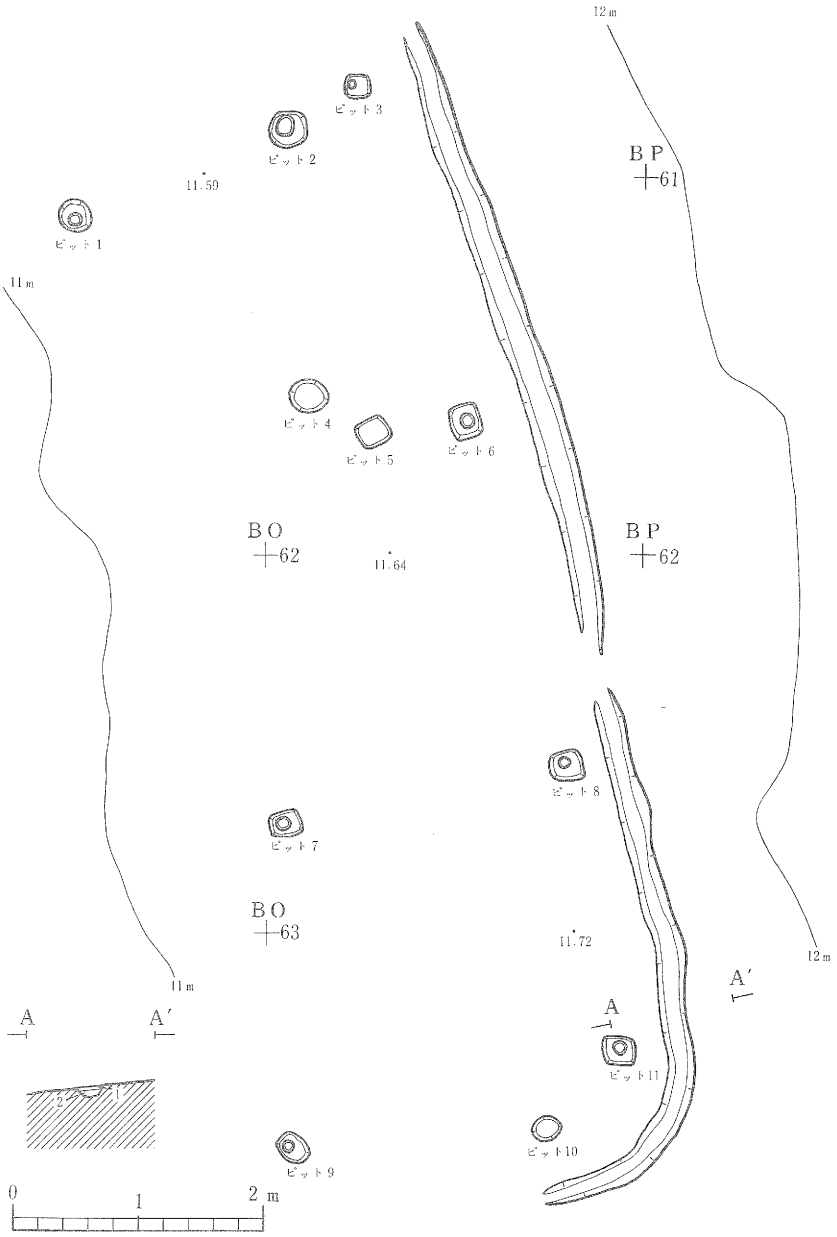
No.	土色	土性	備考	堆積範囲
1	黒褐10YR$^{2}_{3}$	シルト	少量の炭化物を粒状に含。	周溝 1
2	黒褐10YR$^{3}_{1}$	シルト	少量の炭化物、地山土を粒状に含。	〃 2

第10表　4号竪穴遺構土層註記表

正方形を基調とする。ピット2は掘り方及び位置から本遺構の柱穴ではない。ピット4、5、10は柱穴ではない。

〔周溝〕北東側及び南東側の一部が検出された。壁と同様に全部は検出されなかったが、壁沿いに一周するものと推定される。幅32cm、深さ10cmで、断面は「U」形である。底面レベルは北東側が最も高く、南東側に向かうにつれてレベルを減じる。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。



第13図　4号竪穴遺構

(5) 5号竪穴遺構

〔確認面〕基本層序Ⅳ層から確認された。

〔重複・増改築〕周溝がピットに切られている。

〔規模・平面形〕北東側及び南東側の周溝の一部を除いては削平を受けており、全体の規模は不明だが、南北4.5m以上の長方形または正方形を基調とするものと推定される。

〔竪穴層位〕単層で自然堆積層である。

〔壁〕削平を受けており、確認されなかった。

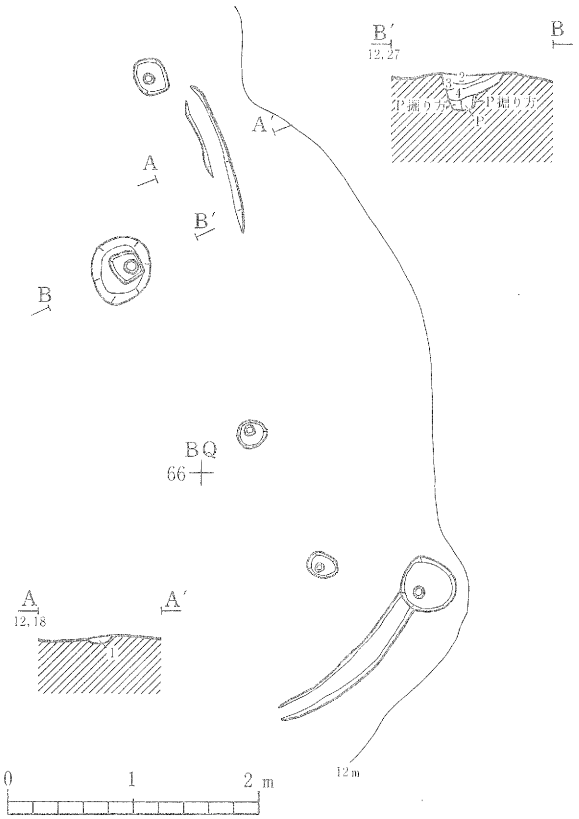
〔床面〕基本層序Ⅳ層を床面とする。全体的にやや硬い。残存する周溝の付近も含めて大きく削平を受け、使用時の面は損われている。

〔柱穴〕5個のピットが検出された。ピット1～4は柱穴である。ピット5は本遺構の柱穴ではない。

〔貯蔵穴状ピット〕1個検出された。長軸0.60m、短軸0.49mの楕円形を呈する。堆積土は3層(層№2、3、4)からなる。底面からはピット2が検出された。

〔周溝〕北東側及び南東側の一部が検出された。壁と同様に全部は検出されなかったが、壁沿いに一周するものと推定される。幅22cm、深さ3cmで、断面は「U」形である。底面レベルは北東隅が最も高く、南東隅に向かうにつれてレベルを減じる。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。



第14図　5号竪穴遺構

№	土　色	土　性	備　考	堆積範囲
1	灰黄褐10YR4/2	シルト	少量の地山土を粒状に含。	周溝 1
2	灰黄褐10YR4/2	シルト	少量の炭化物、地山土を粒状に含。	貯 P 1
3	にぶい黄褐10YR5/3	シルト	多量の地山土を粒～塊状、少量の炭化物を粒状に含。	〃 2
4	にぶい黄褐10YR5/3	シルト	少量の炭化物を粒状、地山土を粒～塊状に含。	〃 3

第11表　5号竪穴遺構土層註記表

(6) 6号竪穴遺構

〔確認面〕基本層序Ⅳ層から確認された。

〔重複・増改築〕認められない。

〔規模・平面形〕北西壁及び北東壁の一部が検出された。その他の部分は検出されなかった。残存する北西壁、北東壁の幅はそれぞれ3.32m、1.85mである。長方形または正方形を基調とするものと推定される。

〔竪穴層位〕5層に細分される。いずれも自然堆積層である。

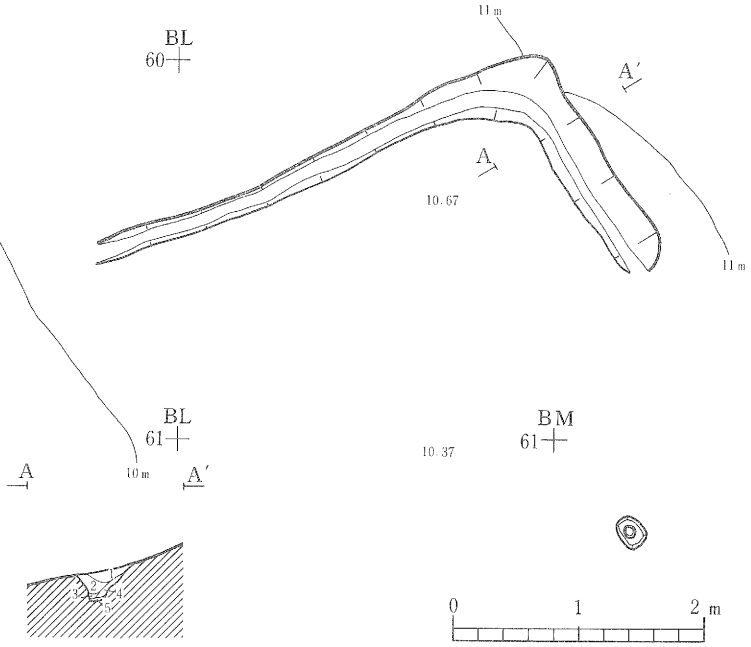
〔壁〕基本層序Ⅳ層からなる。最も保存の良い北西壁では19cmの高さで残存している。床面から急な角度で立ち上がる。

〔床面〕基本層序Ⅳ層を床面とする。凹凸はなく、全体的にやや硬い。残存する周溝付近を除いては大きく削平を受け、使用時の面は損われている。床面レベルは北東隅が最も高く、南西隅に向かうにつれてレベルを減じる。

〔柱穴〕１個のピットが検出された。柱穴である。

〔周溝〕北西側及び北東側の一部が検出された。壁と同様に全部は検出されなかったが、壁沿いに一周するものと推定される。幅37cm、深さ18cmで、断面は「U」形である。底面レベルは南東隅が最も高く、北西隅に向かうにつれてレベルを減じる。

〔出土遺物〕周溝から土師器の破片が出土した。図化できるものはなかった。



第15図　５号竪穴遺構

No.	土　　色	土　性	備　　考	堆積範囲
1	にぶい黄褐10YR4/3	砂質シルト	少量の地山土を粒状に含。	周溝１層
2	暗褐10YR3/4	砂質シルト	少量の炭化物、地山土を粒状に含。	〃　２層
3	にぶい黄褐10YR4/3	砂質シルト	少量の地山土を粒状に含。	〃　３層
4	黄褐10YR5/6	砂質シルト	少量のにぶい黄褐10YR 4/3 砂質シルトを粒～塊状に含。	〃　４層
5	褐10YR4/4	シルト質砂		〃　５層

第12表　６号竪穴遺構土層註記表

(7) 7号竪穴遺構

〔確認面〕基本層序Ⅳ層から確認された。

〔重複・増改築〕３号竪穴遺構を切っている。

〔規模・平面形〕南東壁の全部及び北東壁と南西壁の一部が検出された。その他の部分は検出されなかった。南東壁の幅は5.83m、残存する北東壁、南西壁の幅はそれぞれ1.22m、2.28mである。全体の規模は不明だが、長方形または正方形を基調とするものと推定される。

〔竪穴層位〕３層に細分される。いずれも自然堆積層である。

〔壁〕基本層序Ⅳ層からなる。最も保存の良い北東壁では17cmの高さで残存している。床面から急な角度で立ち上がる。

〔床面〕基本層序Ⅳ層を床面とする。多少凹凸があり、全体的にやや硬い。南東壁付近を除いては大きく削平を受け、使用時の面が損われている。床面レベルは南東隅が最も高く、北西隅に向かうにつれてレベルを減じる。

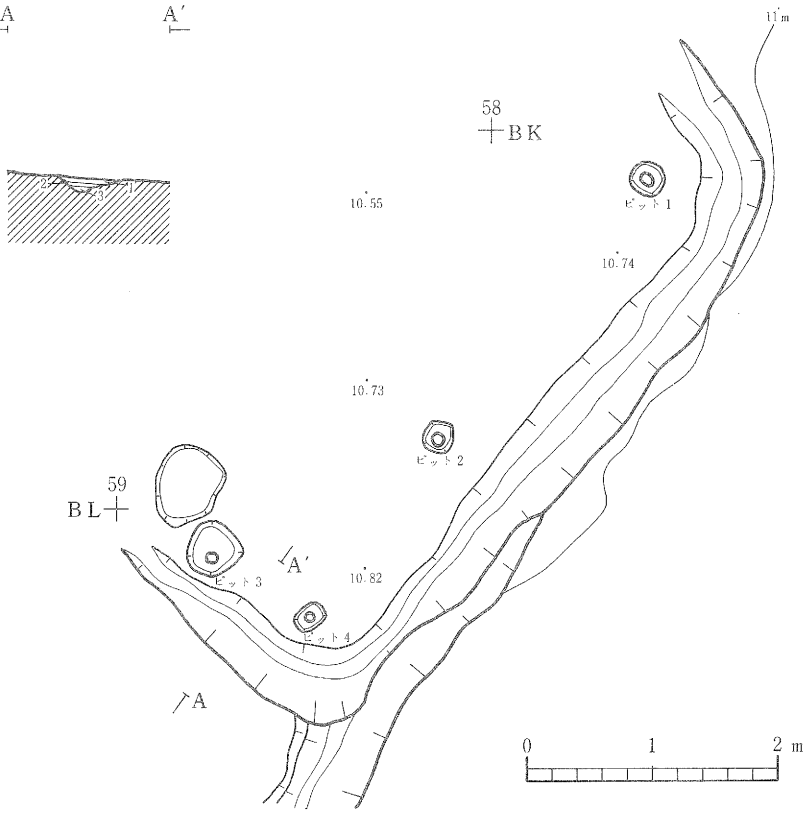
〔柱穴〕４個のピットが検出された。ピット１、２、４は柱穴である。ピット３は本遺構の柱穴ではない。

〔貯蔵穴状ピット〕１個検出された。長軸0.64m、短軸0.52mの不整円形を呈する。堆積土は

単層（層№.4）である。

〔周溝〕壁と同様に全部は検出されなかったが、壁沿いに一周するものと推定される。幅58cm、深さ11cmで、断面は「U」形である。底面レベルは南東隅が最も高く、北西隅に向かうにつれてレベルを減じる。

〔出土遺物〕周溝、貯蔵穴状ピットから土師器の破片が出土した。図化できるものはなかった。



第16図　7号竪穴遺構

№	土　色	土　性	備　考	堆積範囲
1	にぶい黄褐10YR4/3	シルト	少量の地山土を粒～塊状に含。	周溝1層
2	暗灰黄2.5Y4/2	シルト	少量の地山土を粒状に含。	〃 2層
3	にぶい黄褐10YR4/3	砂質シルト	少量の炭化物、地山土を粒状に含。	〃 3層
4	暗褐10YR3/3	砂質シルト	少量の炭化物、地山土を粒状に含。	貯 P 1

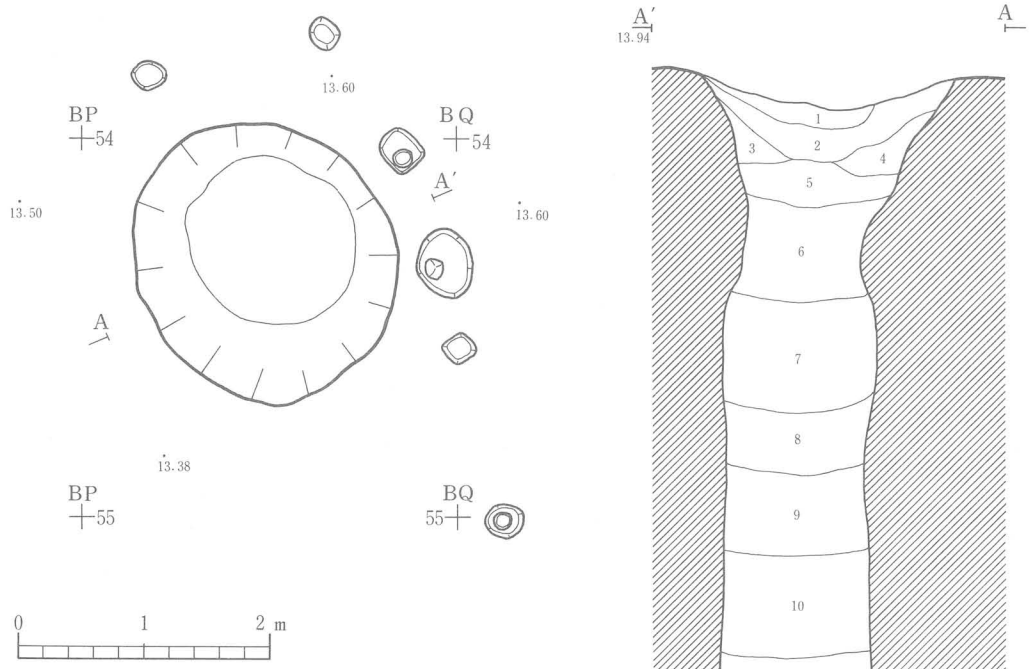
第13表　7号竪穴遺構土層註記表

3．井戸跡

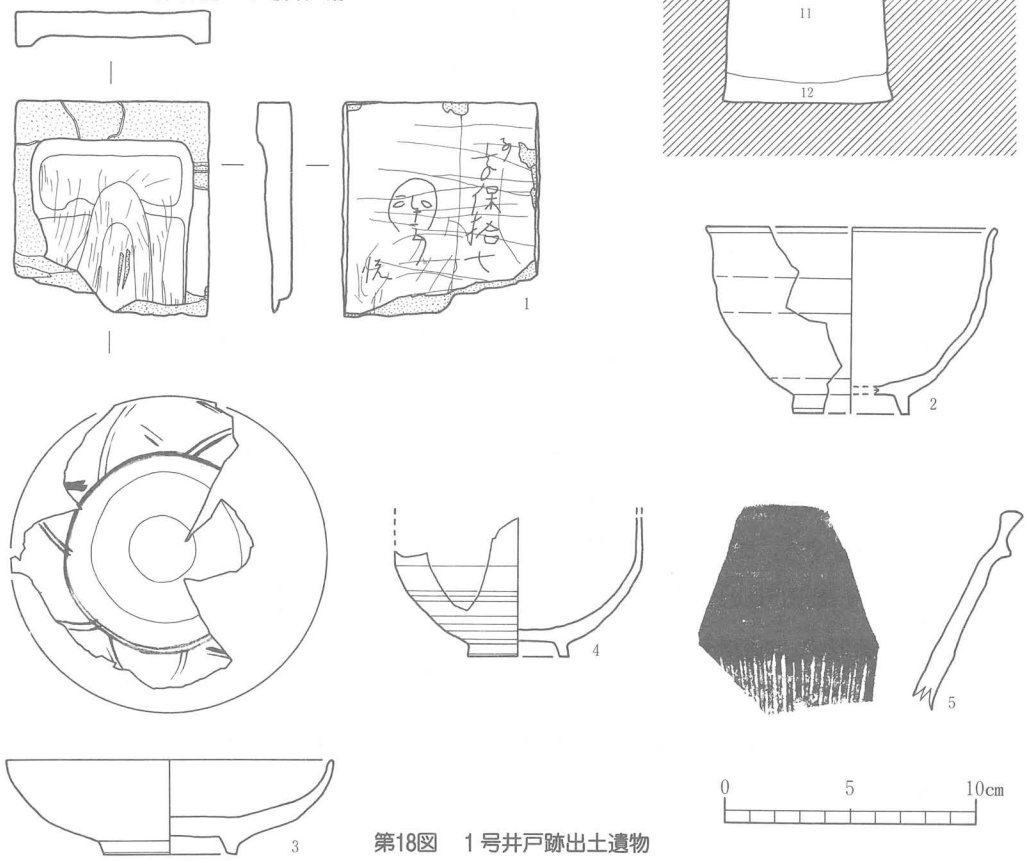
井戸跡は、基本層序Ⅳ層から1基検出された。素掘りの井戸で、重複は認められない。井戸跡の位置する調査区南西部の平坦面は、基本層序Ⅳ層を削平して作られており、そのレベルは、盛土による整地で形成されたⅡ層上面とほぼ同じである。長軸2.27m、短軸2.01m、深さ5.77mの規模で、平面形は上端が楕円形、下端がほぼ円形を呈する。底面はほぼ平坦である。断面形は上部が漏斗状の円筒形で、底面に近づくにつれてフラスコ状にやや広がる。壁には本遺構を掘り込んだ当時の足場穴と思われるものが、北西側及び南東側から対

№	土　色	土　性	備　考	大　別
1	暗褐10YR3/4	シルト	少量の地山土を粒～塊状に含。	自然堆積層
2	褐10YR4/4	砂質シルト	粗砂、多量の地山土を粒～塊状に含。	
3	褐7.5YR4/4	シルト質砂	少量の暗褐10YR3/4砂質シルトを塊状、粗砂を含。	
4	暗褐10YR3/4	砂質シルト	少量の粗砂、地山土、炭化物を粒状に含。	
5	黄褐10YR5/6	シルト質砂	多量の粗砂、少量の炭化物を粒状に含。しまりなし。	
6	褐10YR4/4	シルト質砂	多量の粗砂、少量の炭化物を粒状に含。しまりなし。	
7	にぶい黄褐10YR5/4	砂質シルト	少量の粗砂、炭化物を粒状に含。しまりなし。	
8	暗褐10YR3/3	シルト	少量の粗砂、炭化物を粒状に含。しまりなし。	
9	オリーブ黒7.5Y3/1	砂質シルト	少量の粗砂、炭化物を粒状に含。しまりなし。	
10	灰N4/	シルト	少量の粗砂、炭化物を粒状に含。しまりなし。	
11	暗緑灰7.5GY4/1	シルト	少量の植物遺存体を含。グライ化。しまりなし。	
12	青灰5BG6/1	シルト質粘土	強いグライ化。しまりなし。	

第14表　1号井戸跡土層註記表



第17図　1号井戸跡



第18図　1号井戸跡出土遺物

をなして検出された。幅15～20㎝、奥行き10㎝前後の規模で、ほぼ30㎝間隔で上下に並ぶ。

No.	種別・器形	層位	口径・底径・器高(㎝)	産　地	年　代	備　考
1	硯	8層	(長9.5幅7.7厚1.4)	雄　勝	18C.前半？	ウラに「享保拾七子」、図版7－2－5
2	施釉陶器碗	8層	10.5・4.6・7.4	相馬大堀	18C.後半	図版7－2－3
3	施釉陶器碗	11層	－・・・4.0・(5.5)	相馬大堀	18C.後半	灰釉・鉄釉掛け分け、図版7－2－1
4	磁　器　皿	11層	13.0・5.2・3.8	肥　前	18　C.	蛇の目釉はぎ、図版7－2－4
5	施釉陶器　擂鉢	11層	――・――・――	不　明	不　明	鉄釉、図版7－2－2

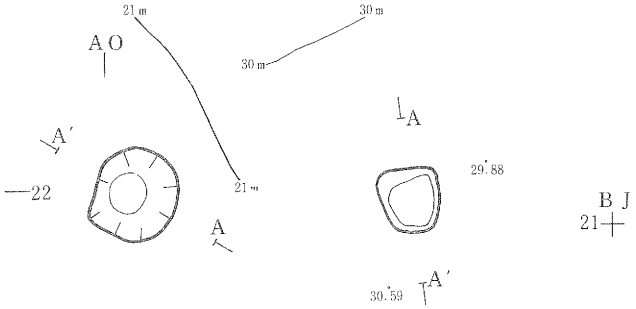
第15表　1号井戸跡出土遺物

堆積土は、上部が暗褐色からにぶい黄褐色の砂質シルト及びシルト質砂を、下部はグライ化したシルトを主体とする。12層に細分され、いずれも自然堆積層である。

周辺からは6個のピットが検出されたが、本遺構に伴うものとは推定されなかった。

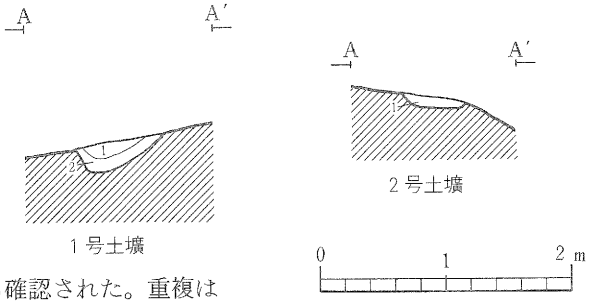
遺物は層№8から硯(雄勝産[註1])、灰釉陶器(相馬大堀[註1])、層№11からは灰釉陶器(相馬大堀)、擂鉢(常滑？、産地不明)、磁器(肥前)、瓦質陶器が出土している(第18図)。硯は、長さ4寸5分(約13.9㎝)または5寸(約15.4㎝)、幅2寸5分(約7.7㎝)のもので、漆仕上げされておらず墨痕もなく未製品である。砥石に転用されたものと推定される。硯のウラには「享保拾七子」(1732)、「悦？」と人面？の線刻がある。

註1．硯については雄勝硯生産販売協同組合理事長高橋寅一氏より、陶磁器類の産地・年代等については仙台市教育委員会佐藤洋氏より御教示を得た。



4．土　壙

土壙は調査区北側の頂部平坦面及び南斜面、西斜面、調査区南西部の平坦面から9基検出された。この中で、3号・5号土壙は墓壙である。



第19図　1号土壙・2号土壙

(1) 1号土壙

調査区北側西斜面の基本層序Ⅳ層から確認された。重複は認められない。長軸0.74m、短軸0.65m、深さ0.30mの規模で、平面形は不整円形を呈する。床面は丸底で、壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は2層に細分される。いずれも自然堆積層である。

1号土壙

No.	土　色	土　性	備　考	大　別
1	黒　褐 10YR2/2	シルト	少量の炭化物、地山土を粒状に含。	自然堆積層
2	暗　褐 10YR3/3	シルト	少量の地山土を粒状に含。	

2号土壙

No.	土　色	土　性	備　考	大　別
1	暗　褐 10YR3/3	シルト	少量の炭化物を粒状に含。	自然堆積層

第16表　1号土壙・2号土壙土層註記表

(2) 2号土壙

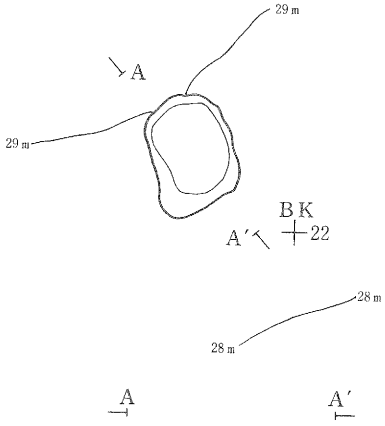
調査区北側頂部平坦面の基本層序Ⅳ層から確認された。重

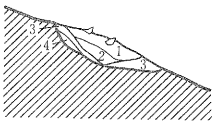
複は認められない。長軸0.51m、短軸0.48m、深さ0.15mの規模で、平面形は不整方形を呈する。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は単層で、自然堆積層である。

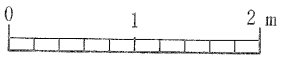
(3) 3号土壙

調査区北側南斜面の基本層序Ⅳ層から確認された。墓壙である。重複は認められない。長軸0.92m、短軸0.67m、深さ0.25mの規模で、平面形は不整方形を呈する。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は4層に細分され、自然堆積土(層№.1、2)と人為的埋土(層№.3、4)からなる。

遺物は、須恵器甕が立位で出土した(第21図)。甕内部からは多量の骨片が出土した。人骨と推定される。甕の規模から、これらの骨片は火葬または再葬されたものと推定される。



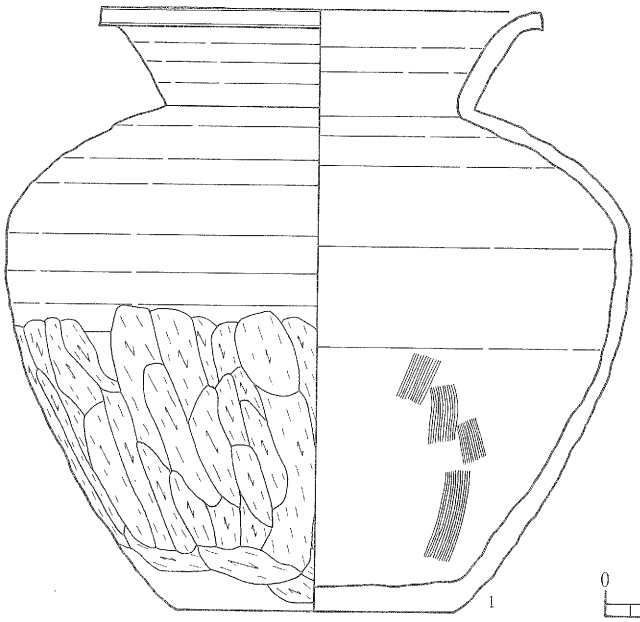


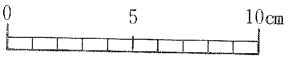


第20図　3号土壙

№.	土　色	土　性	備　　考	大　別
1	黒 2.5Y2/1	シルト	少量の炭化物、地山土を粒状に含。	自然堆積層
2	黒 10YR1.7/1	シルト	少量の炭化物を粒～塊状、地山土を粒状に含。	
3	黒 10YR1.7/1	砂質シルト	多量の地山土を粒～塊状に含。	人為的埋土
4	黒褐 10YR3/1	砂質シルト	地山土との混合層。	

第17表　3号土壙土層註記表





№.	種　別	層位	外　　面	内　　面	底　部	口径・底径・器高(cm)	備　考
1	須恵器甕	2層	口縁～体上半：ロクロナデ、体下半：ロクロナデ～ヘラケズリ	口縁～体上半：ロクロナデ、体下半：ロクロナデ	ケズリ	17.4・11.0・23.9	図版8－2

第21図　3号土壙出土遺物

(4) 4号土壙

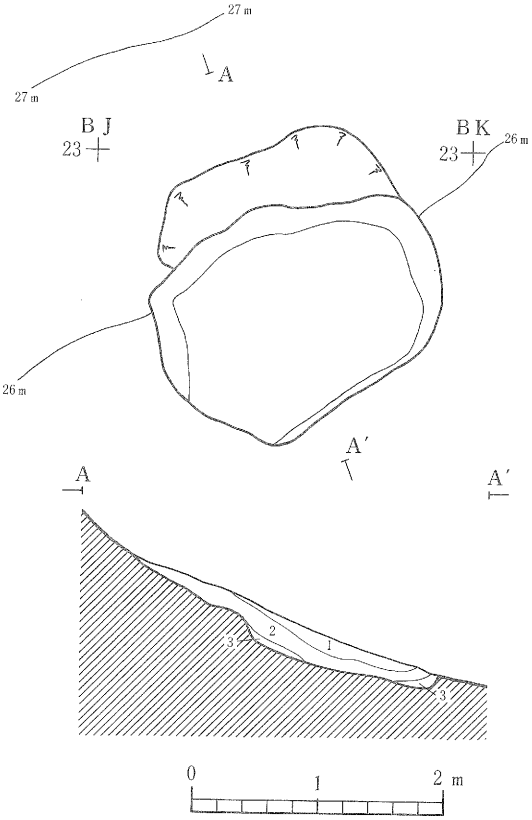
調査区北側南斜面の基本層序Ⅳ層から確認された。重複は認められない。長軸2.36m、短軸

1.66m、深さ0.62mの規模で、平面形は隅丸長方形を呈する。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。また、北壁の一部が崩落している。堆積土は3層に細分され、いずれも自然堆積層である。

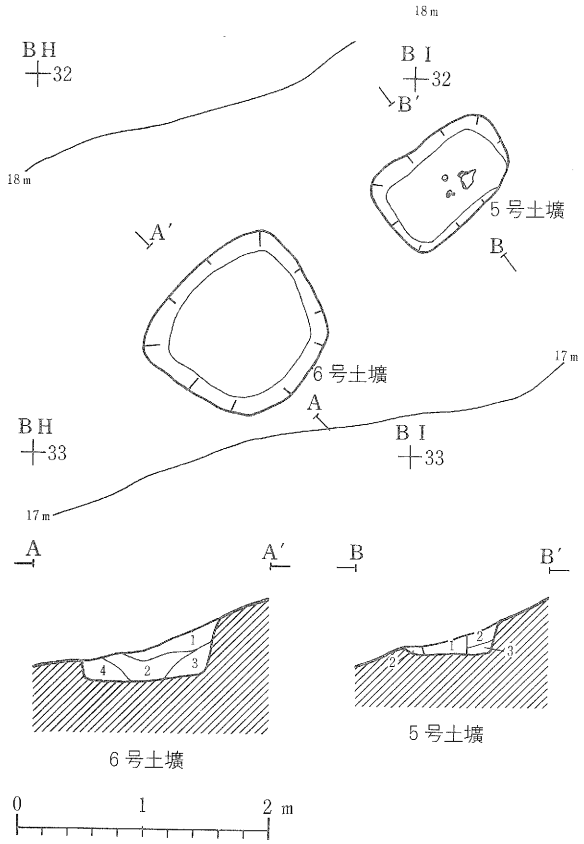
(5) 5号土壙

調査区北側南斜面の基本層序Ⅳ層から確認された。墓壙である。重複は認められない。長軸1.12m、短軸0.75m、深さ0.34mの規模で、平面形は隅丸長方形を呈する。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は3層に細分され、人為的埋土(層No.2、3)と自然堆積土(層No.1)からなる。

遺物は、金属製品(鍋、煙管)、古銭(寛永通寶)、木製品(棺材？)が出土している(第24図)。



第22図　4号土壙



第23図　5号土壙・6号土壙

4号土壙

No.	土　色	土　性	備　考	大　別
1	暗　褐 10YR3/3	シルト	少量の地山土を粒～塊状に含。	自　然 堆積層
2	にぶい黄褐 10YR5/4	砂　質 シルト	少量の炭化物を粒状に含。	
3	黄　褐 10YR5/6	シルト 質　砂	少量の炭化物を粒状に含。	

5号土壙

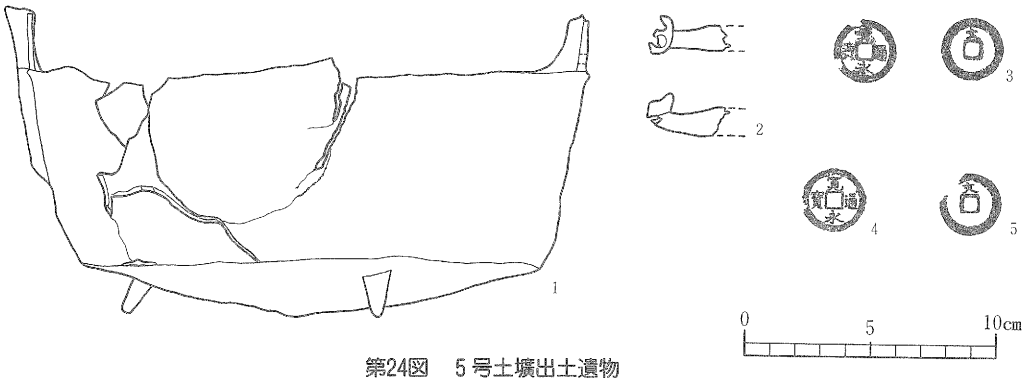
No.	土　色	土　性	備　考	大　別
1	暗　褐 10YR3/3	シルト	少量の炭化物を粒状に含。	自　然 堆積層
2	黒　褐 10YR2/3	シルト	少量の炭化物、地山土を粒状に含。	人為的 埋　土
3	褐 10YR4/4	砂　質 シルト	少量の黒褐10YR3/1シルトを粒～塊状に含。	

6号土壙

No.	土　色	土　性	備　考	大　別
1	黒　褐 10YR3/2	シルト	少量の炭化物を粒状に含。	自　然 堆積層
2	黒　褐 10YR2/3	シルト	少量の炭化物、焼土を粒状に含。	
3	黒　褐 10YR3/1	シルト	少量の炭化物、焼土を粒～塊状に含。	
4	灰黄褐 10YR4/2	シルト	少量の炭化物を粒状、地山土を粒～塊状に含。	

第18表　4号土壙・5号土壙・6号土壙土層註記表

第24図



第24図　5号土壙出土遺物

No.	種別・器形	口径・底径・器高(cm)	産地	年代	備考	図版
1	金属製品・鉄鍋	21.6・18.3・9.8	不明	不明	吊下把手穴付(吊下把手は出土せず)	9－2－5
2	金属製品・煙管	長：3.3cm　雁首径：1.3cm		江戸		9－2－4
3	古銭・寛永通寶	直径：2.5cm		17C.後半	新寛永、正字文、初鋳年：寛文8年(1668)	9－2－3
4	古銭・寛永通寶	直径：2.4cm		17C.後半以降	新寛永、詳細不明	9－2－1
5	古銭・寛永通寶	直径：2.4cm		17C.後半	新寛永、退点文、初鋳年：寛文8年(1668)	9－2－2

第19表　5号土壙出土遺物

なお、本遺構上に存在したと推定される墓碑には、「天明四年七月十二日清林道光善男」と記されている。

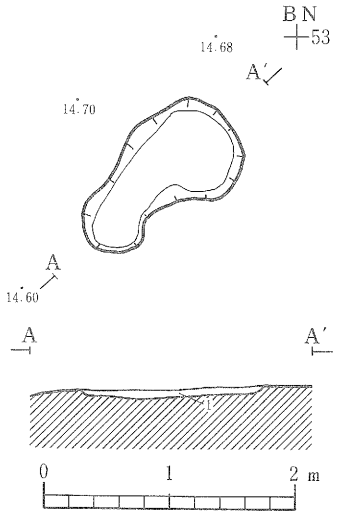
(6) 6号土壙

調査区北側南斜面の基本層序Ⅳ層から確認された。重複は認められない。長軸1.40m、短軸1.25m、深さ0.65mの規模で、平面形は逆台形を呈する。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は4層に細分され、いずれも自然堆積層である。

(7) 7号土壙

調査区南西部平坦面の基本層序Ⅳ層から確認された。重複は認められない。長軸1.46m、短軸0.85m、深さ0.11mの規模で、平面形は足形を呈する。底面はほぼ平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は単層で、自然堆積層である。

遺物は、瀬戸美濃？の灰釉皿の破片が1点出土している。



第25図　7号土壙

No.	土色	土性	備考	大別
1	褐10YR4/4	シルト	少量の炭化物を粒～塊状、地山土を粒状に含。	自然堆積層

第20表　7号土壙土層註記表

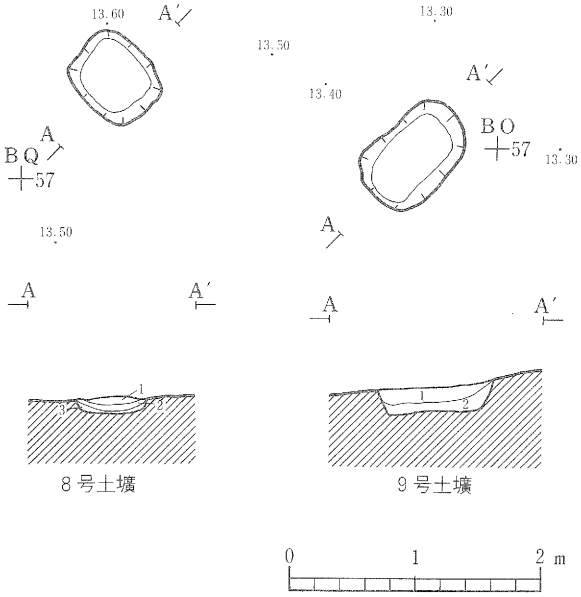
(8) 8号土壙

調査区南西部平坦面の基本層序Ⅳ層から確認された。重複は認められない。長軸0.70m、短軸0.59m、深さ

0.19mの規模で、平面形は隅丸長方形を呈する。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は3層に細分され、いずれも自然堆積層である。

(9) 9号土壙

調査区南西部平坦面の基本層序Ⅱ層から確認された。重複は認められない。長軸0.88m、短軸0.57m、深さ0.30mの規模で、平面形は隅丸長方形を呈する。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は2層に細分され、いずれも自然堆積層である。



第26図　8号土壙・9号土壙

8号土壙

No.	土色	土性	備考	大別
1	暗褐 10YR3/4	シルト	粗砂含。少量の地山土を粒状に含。	自然堆積層
2	褐 10YR4/4	砂質シルト	粗砂含。少量の炭化物を粒状に含。	
3	褐 10YR5/6	砂	マンガン粒沈着。少量の炭化物を粒状に含。	

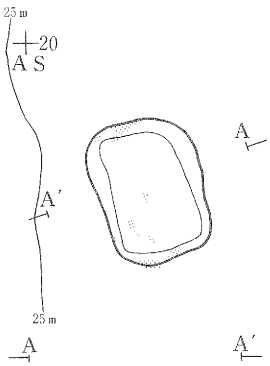
9号土壙

No.	土色	土性	備考	大別
1	にぶい黄褐 10YR4/3	シルト	多量の地山土を粒～塊状、少量の炭化物を粒状に含。	自然堆積層
2	褐 10YR4/4	シルト	多量の地山土を粒～塊状、少量の炭化物を粒状に含。	

第21表　8号土壙・9号土壙土層註記表

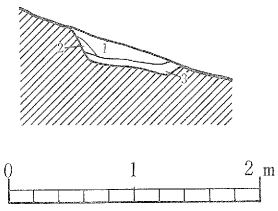
5．焼土遺構

焼土遺構は、調査区北側の頂部平坦面及び南斜面、西斜面、調査区南側の西斜面から7基検出された。



(1) 1号焼土遺構

調査区北側西斜面の基本層序Ⅳ層から確認された。重複は認められない。長軸1.14m、短軸0.80m、深さ0.41mの規模で、平面形は隅丸長方形を呈する。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。底面及び側壁の一部が赤褐色に火熱を受けている。堆積土は3層に細分され、自然堆積層(層No.1、2)、炭化物層(層No.3)からなる。



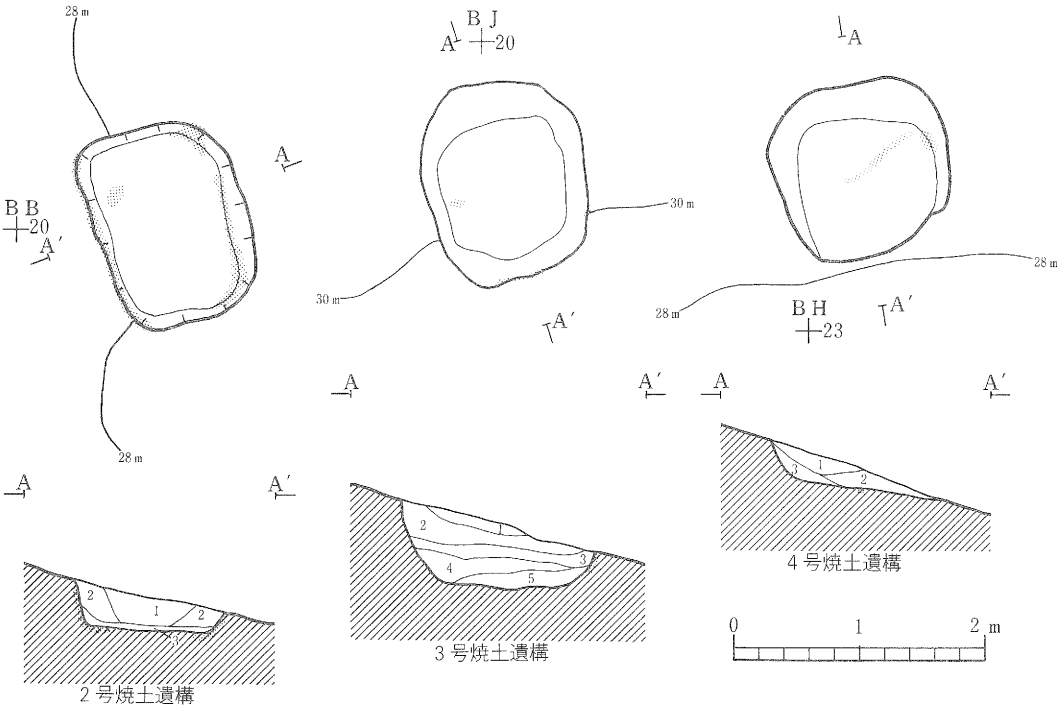
第27図　1号焼土遺構

No.	土色	土性	備考	大別
1	暗褐 10YR3/4	砂質シルト	少量の炭化物を粒状に含。	自然堆積層
2	褐 10YR4/6	シルト質砂	少量の暗褐10YR3/4砂質シルトを斑状に含。	
3	黒 10YR2/1			炭化物層

第22表　1号焼土遺構土層註記表

(2) 2号焼土遺構

調査区北側西斜面の基本層序Ⅳ層から確認された。重複は認められない。



第28図　2号焼土遺構・3号焼土遺構・4号焼土遺構

長軸1.58m、短軸1.16m、深さ0.46mの規模で、平面形は隅丸長方形を呈する。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。底面及び側壁の一部が赤褐色に火熱を受けている。堆積土は3層に細分され、いずれも自然堆積層である。このうち、層№1には灰白色火山灰が混入している。

2号焼土遺構

No.	土色	土性	備考	大別
1	灰黄褐 10YR 3/2	砂質シルト	少量の灰白色火山灰を塊状、炭化物、地山土を粒状に含。	自然堆積層
2	褐 7.5YR 4/4	砂質シルト	少量の炭化物、焼土を粒状に含。	
3	黒 10YR 2/1	シルト	少量の焼土を粒～塊状に含。	

3号焼土遺構

No.	土色	土性	備考	大別
1	黒褐 10YR 3/2	シルト	少量の炭化物を粒状に含。	自然堆積層
2	にぶい黄褐 10YR 5/3	砂質シルト	少量の炭化物、地山土を粒状に含。	
3	褐 10YR 4/4	砂質シルト	少量の地山土を粒状に含。	
4	暗褐 10YR 3/3	砂質シルト	少量の炭化物、地山土を粒状に含。	
5	黒褐 10YR 3/2	シルト	少量の炭化物、焼土、地山土を粒状に含。	

4号焼土遺構

No.	土色	土性	備考	大別
1	暗褐 10YR 3/3	シルト	少量の炭化物を粒状、地山土を粒～塊状に含。	自然堆積層
2	黒褐 10YR 3/1	シルト	少量の炭化物を粒状に含。	
3	黄褐 10YR 5/6	砂質シルト	少量の炭化物を粒～塊状に含。	

第23表　2号焼土遺構・3号焼土遺構
4号焼土遺構土層註記表

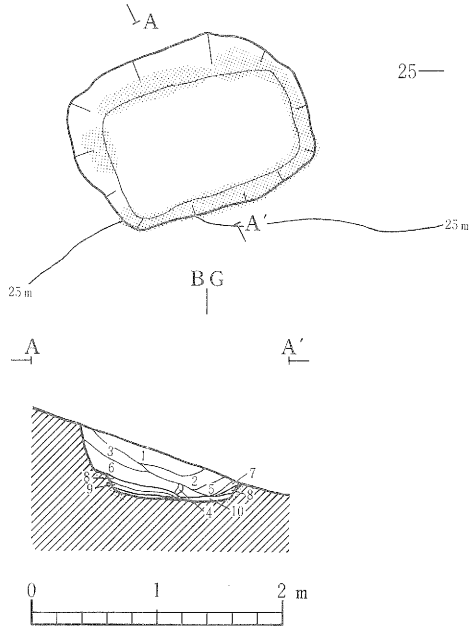
(3) 3号焼土遺構

調査区北側頂部平坦面の基本層序Ⅳ層から確認された。重複は認められない。長軸1.57m、短軸1.30m、深さ0.72mの規模で、平面形は隅丸長方形を呈する。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。底面及び側壁の一部がにぶい赤褐色に火熱を受けている。堆積土は5層に細分され、いずれも自然堆積層である。

(4) 4号焼土遺構

調査区北側南斜面の基本層序Ⅳ層から確認された。重複は認められない。長軸1.40m、短軸

1.35m、深さ0.52mの規模で、平面形は隅丸正方形を呈する。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。底面及び側壁の一部がにぶい赤褐色に火熱を受けている。堆積土は3層に細分され、いずれも自然堆積層である。



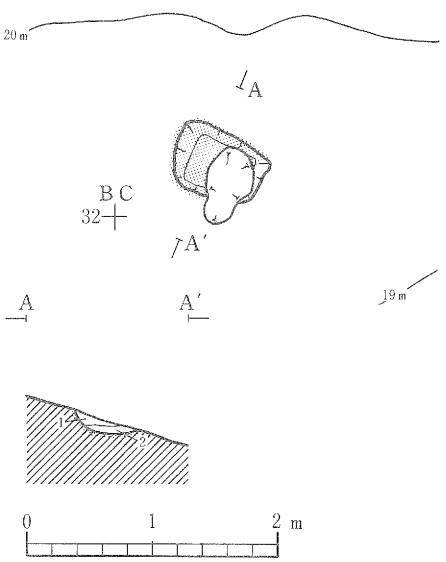
第29図　5号焼土遺構

(5) 5号焼土遺構

調査区北側南斜面の基本層序Ⅳ層から確認された。重複は認められない。長軸1.85m、短軸1.33m、深さ0.68mの規模で、平面形は隅丸長方形を呈する。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。底面及び側壁の一部が赤褐色に火熱を受けている。堆積土は10層に細分され、自然堆積層(層№.1～7)、壁崩落土(層№.8、9)、炭化物層(層№.10)からなる。

№	土色	土性	備考	大別
1	暗褐10YR3/3	シルト	少量の地山土を粒～塊状、炭化物を粒状に含。	自然堆積層
2	黒褐10YR3/3	シルト	少量の炭化物を粒状に含。	
3	にぶい黄褐10YR4/3	シルト	少量の地山土を斑状に含。	
4	黒褐10YR2/2	シルト	少量の地山土を粒状に含。	
5	暗褐10YR3/3	砂質シルト	少量の炭化物を粒状に含。	
6	黄褐10YR5/6	シルト質砂	少量の炭化物を粒状に含。	
7	暗褐7.5YR3/4	砂質シルト	少量の炭化物を粒状に含。	
8	黄褐10YR5/6	砂質シルト	少量の炭化物、焼土を粒状に含。	壁崩落土
9	暗赤褐5YR3/6	砂質シルト		
10	黒10YR1.7/1		少量の焼土を粒状に含。	炭化物層

第24表　5号焼土遺構土層註記表



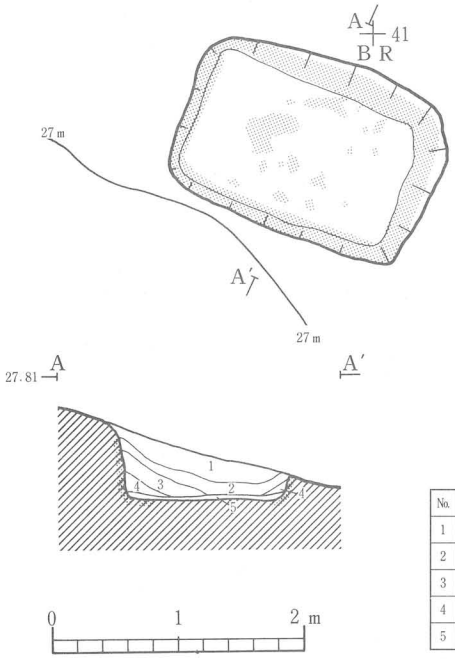
第30図　6号焼土遺構

№	土色	土性	備考	大別
1	黒褐10YR3/2	シルト	少量の炭化物、焼土を粒～塊状に含。	自然堆積層
2	暗褐10YR3/3	シルト	少量の炭化物、焼土を粒～塊状に含。	

第25表　6号焼土遺構土層註記表

(6) 6号焼土遺構

調査区北側南斜面の基本層序Ⅲ層から確認された。攪乱により、一部削平を受けている。長軸0.73m、短軸0.52m、深さ0.24mの規模で、平面形は隅丸長方形を呈する。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。底面及び側壁の大部分が赤褐色に火熱を受けている。側壁からは、本遺構を掘り込んだ当時のものと推定される工具痕が検出された。堆積土は2層に細分され、いずれも自然堆積層である。



第31図　7号焼土遺構

(7) 7号焼土遺構

調査区南側西斜面の基本層序Ⅳ層から確認された。重複は認められない。長軸2.08m、短軸1.43m、深さ0.61mの規模で、平面形は隅丸長方形を呈する。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。底面及び側壁の一部が赤褐色に火熱を受けている。側壁からは本遺構を掘り込んだ当時のものと推定される工具痕が検出された。堆積土は5層に細分され、自然堆積層(層No.1～4)、炭化物層(層No.5)からなる。

No.	土　色	土　性	備　考	大　別
1	暗褐10YR3/3	砂質シルト	少量の炭化物、地山土を粒状に含。	自然堆積層
2	褐10YR4/4	砂質シルト	少量の暗褐10YR3/3砂質シルト、炭化物、地山土を粒状に含。	
3	黄褐10YR5/6	シルト質砂	少量の炭化物を粒状に含。	
4	黄褐10YR5/6	シルト質砂	少量の炭化物を粒状、焼土を塊状に含。	
5	黒N1.5/		少量の褐10YR4/4砂質シルトを粒状に含。	炭化物層

第26表　7号焼土遺構土層註記表

6．溝　跡

溝跡は、調査区南西部平坦面及び緩斜面から4条検出された。この中で、3号・4号溝跡は江戸期のものと推定される。

(1) 1号溝跡

調査区南西部緩斜面の基本層序Ⅳ層から確認された。2号住居跡の北西壁の一部を切っている。幅60～120cm、深さ10～40cmの規模で、断面形は舟底形を呈する。底面レベルは2号住居跡の南東隅に接した部分が最も高く、北西隅に向かうにつれてレベルを減じる。堆積土は5層に細分され、いずれも自然堆積層である。

(2) 2号溝跡

調査区南西部緩斜面の基本層序Ⅳ層から確認された。3個のピット及び撹乱穴に切られている。幅30～80cm、深さ10～50cmの規模で、断面形は舟底形を呈する。底面レベルは北西隅が最も高く、南東隅に向かうにつれ

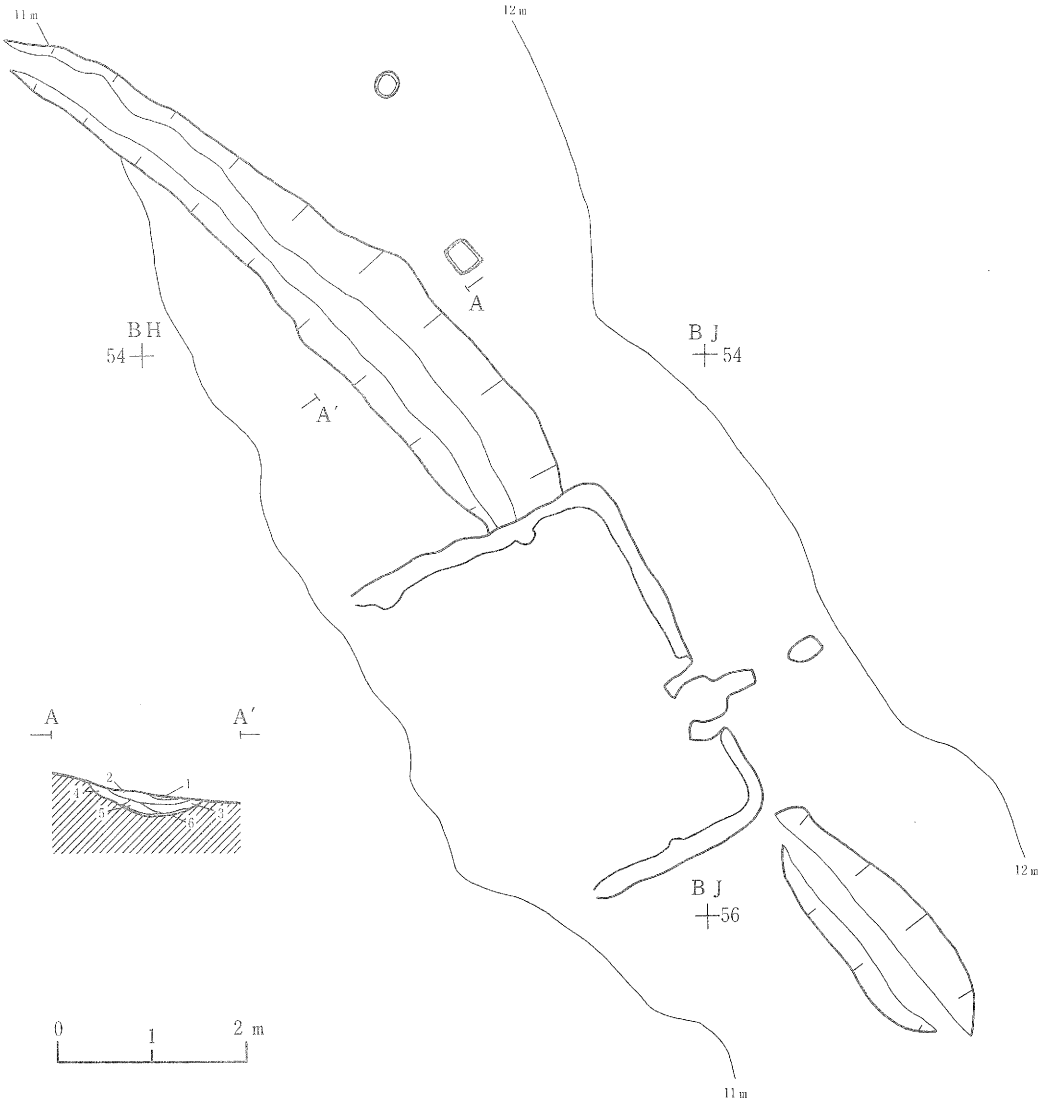
1号溝跡

No.	土　色	土　性	備　考	大　別
1	黄褐 10YR5/6	シルト	多量の褐10YR4/4砂質シルトを塊状に含。	自然堆積層
2	にぶい黄褐 10YR4/3	シルト	少量の炭化物、地山土を粒状に含。	
3	灰黄褐 10YR5/2	粘土質シルト	少量の地山土を粒～塊状に含。	
4	にぶい黄褐 10YR4/3	シルト	少量の地山土を粒状に含。	
5	黄褐 10YR5/6	砂質シルト	少量のにぶい黄褐10YR5/3砂質シルトを粒～塊状に含。	
6	にぶい黄褐 10YR5/3	シルト質粘土	少量の地山土を粒状に含。	

2号溝跡

No.	土　色	土　性	備　考	大　別
1	黒 10YR2/1	シルト	少量の炭化物、焼土を粒状に含。	自然堆積層
2	灰黄褐 10YR5/2	砂質シルト	少量の地山土を粒状に含。	

第27表　1号溝跡・2号溝跡土層註記表



第32図　1号溝跡

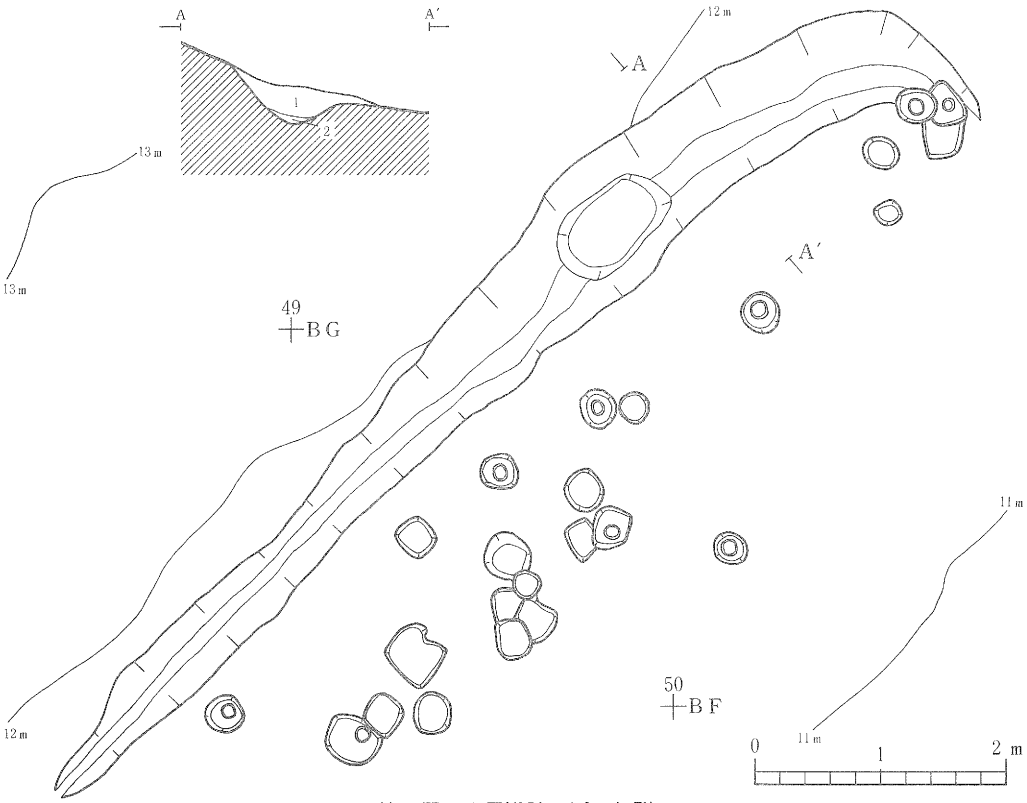
てレベルを減じる。堆積土は2層に細分され、いずれも自然堆積層である。

遺物は、層No.1より土師器片が出土している。

なお、本遺構の南西側にはピット群が検出されているが、ピット群との同時性は確認されなかった。

(3) 3号溝跡

調査区南西部平坦面の北東端の全部及び南東端、北西端の一部を区画する溝で、基本層序Ⅱ層及びⅣ層から確認された。南東隅に近い一部が攪乱穴に切られている。幅60～130cm、深さ10



第33図　2号溝跡・ピット群

～25cmの規模で、断面形は基本的に舟底形を呈する。底面レベルは4号溝跡と接する部分のやや南東側が最も高く、両端に向かうにつれてレベルを減じる。堆積土は2層に細分され、いずれも自然堆積層である。

遺物は、層No.1及び層No.2より施釉陶器(相馬大堀・唐津ほか)、擂鉢(鉄釉・無釉)、磁器(肥前)、土師質陶器が出土している。

No.	土　色	土　性	備　　考	大　別
1	にぶい黄褐 10YR 4/3	砂　質 シルト	粗砂含。少量の炭化物を粒状、地山土を粒～塊状に含。	自　然 堆積層
2	褐　灰 10YR 4/1	砂　質 シルト	少量の地山土を粒状に含。	

第28表　3号溝跡土層註記表

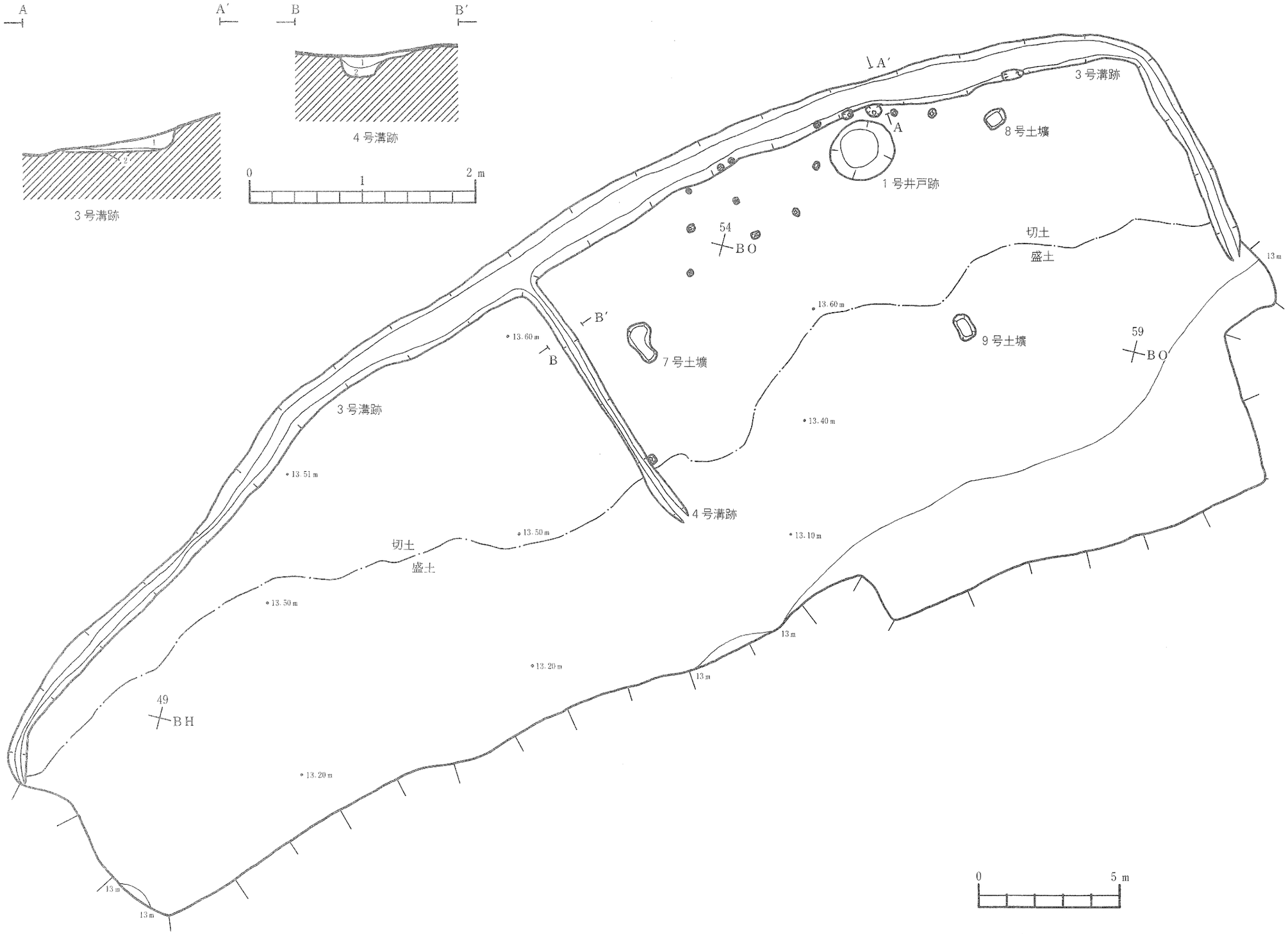
(4) 4号溝跡

調査区南西部平坦面のほぼ中央を南北に二分する溝で、基本層序Ⅱ層及びⅣ層から確認された。重複はない。幅40～60cm、深さ10～15cmの規模で、断面形は基本的に舟底形を呈する。底面レベルは3号溝跡に接する部分が最も高く、南西隅に向かうにつれてレベルを減じる。堆積土は2層に細分され、いずれも自然堆積層である。

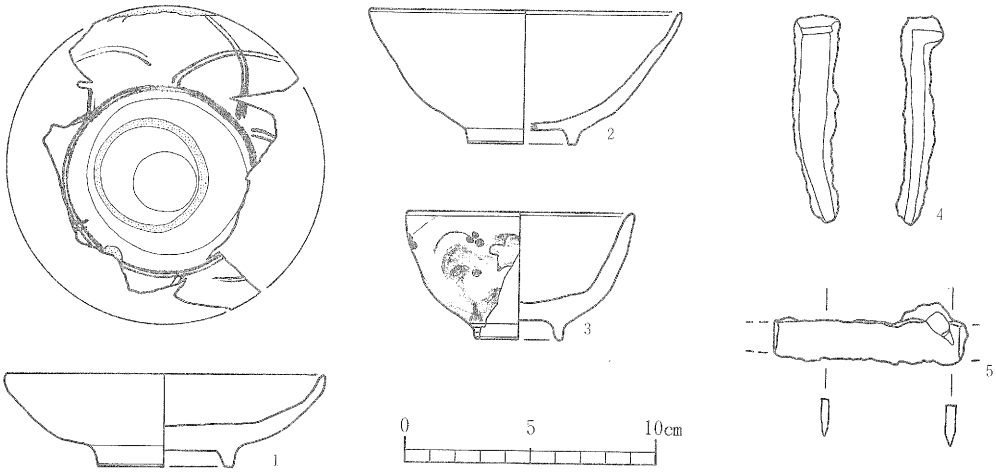
遺物は、層No.2より擂鉢(鉄釉)が出土している。図化できるものはなかった。

No.	土　色	土　性	備　　考	大　別
1	暗　褐 10YR 3/3	シルト	少量の炭化物を粒状、地山土を粒～塊状に含。	自　然 堆積層
2	にぶい黄褐 10YR 4/3	シルト	粗砂含。少量の地山土を粒～塊状に含。	

第29表　4号溝跡土層註記表



第34図　3号溝跡・4号溝跡・整地面



第35図　3号溝跡出土遺物

No.	種別・器形	口径・底径・器高(cm)	産地	年代	特徴	図版
1	磁器・皿	12.5・5.4・3.7	肥前	18C	染付，見込蛇の目釉剥ぎ	15－1
2	陶器・碗	12.5・4.4・5.3	産地不明	18C.以後	灰釉	
3	磁器・碗	9.1・3.5・5.1	肥前	18C.	染付，梅樹文・くらわんか手	15－2
4	金属製品・釘	長：7.8cm　幅：1.1cm　厚：0.5cm	不明			15－4
5	金属製品・小刀	長：7.7cm　幅：1.7cm　厚：0.4cm	不明			15－3

第30表　3号溝跡出土遺物

7．その他の遺構と出土遺物

以上の遺構のほかに、調査区南西部平坦面及び緩斜面よりピット群、整地面が検出された。

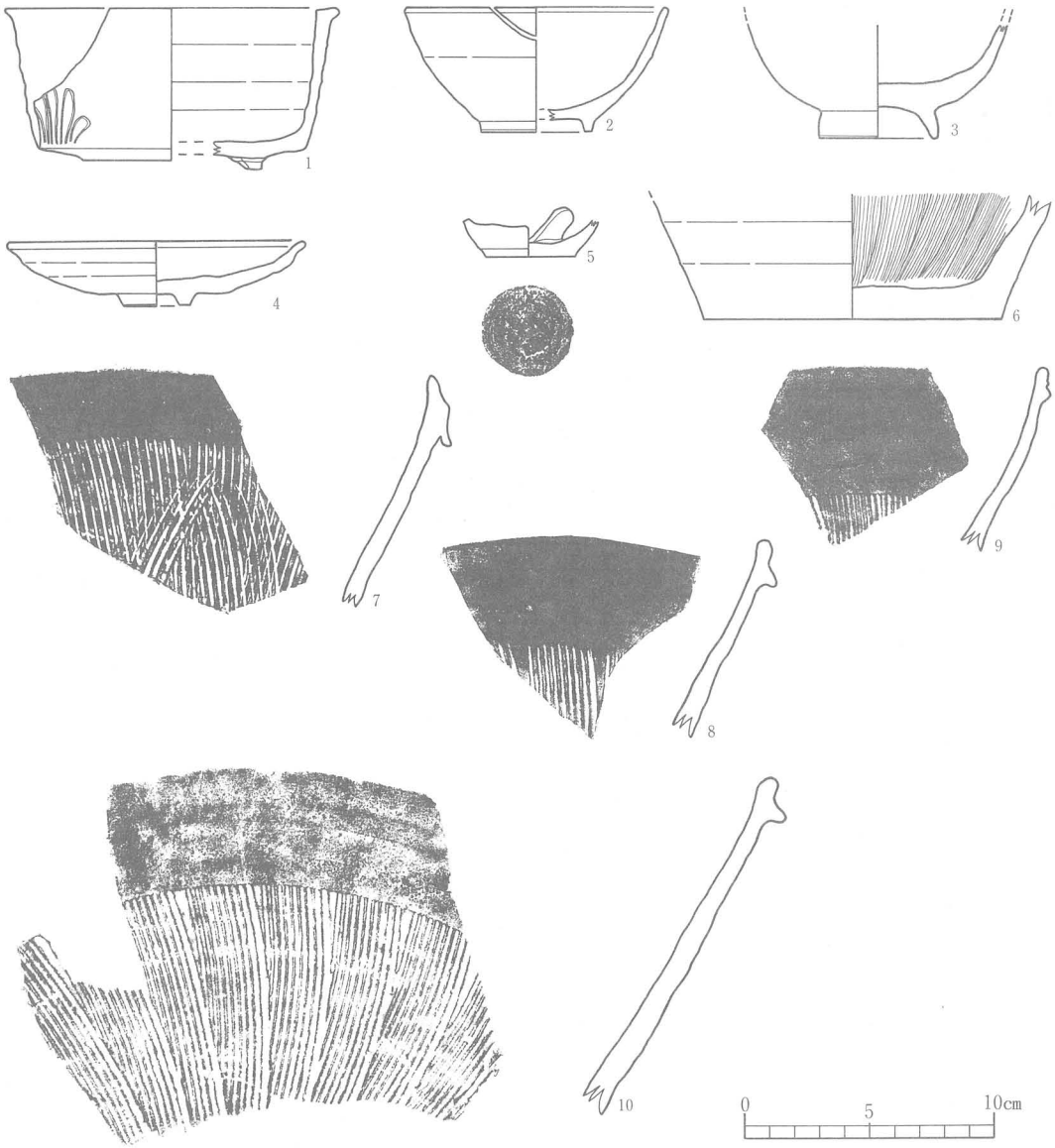
(1)ピット群

調査区南西部平坦面及び緩斜面の基本層序Ⅳ層から約39個のピットが検出された。径20～50cmと大小さまざまで、平面形や深さも一定しない。堆積土も多様である。柱痕跡の確認されたものも19個あるが、いずれも周囲のピットとの対応関係は認められなかった。

(2)整地面

調査区南西部平坦面を形成する基本層序Ⅱ層及びⅣ層からなる。基本層序Ⅳ層の一部を切土し、基本層序Ⅲ層上に盛土して整地面が形成されている。平面レベルは4号溝跡のやや北側が最も高く、北端、南端に向かうにつれてレベルを減じる。最高所と最低所のレベル差は、128cmである。

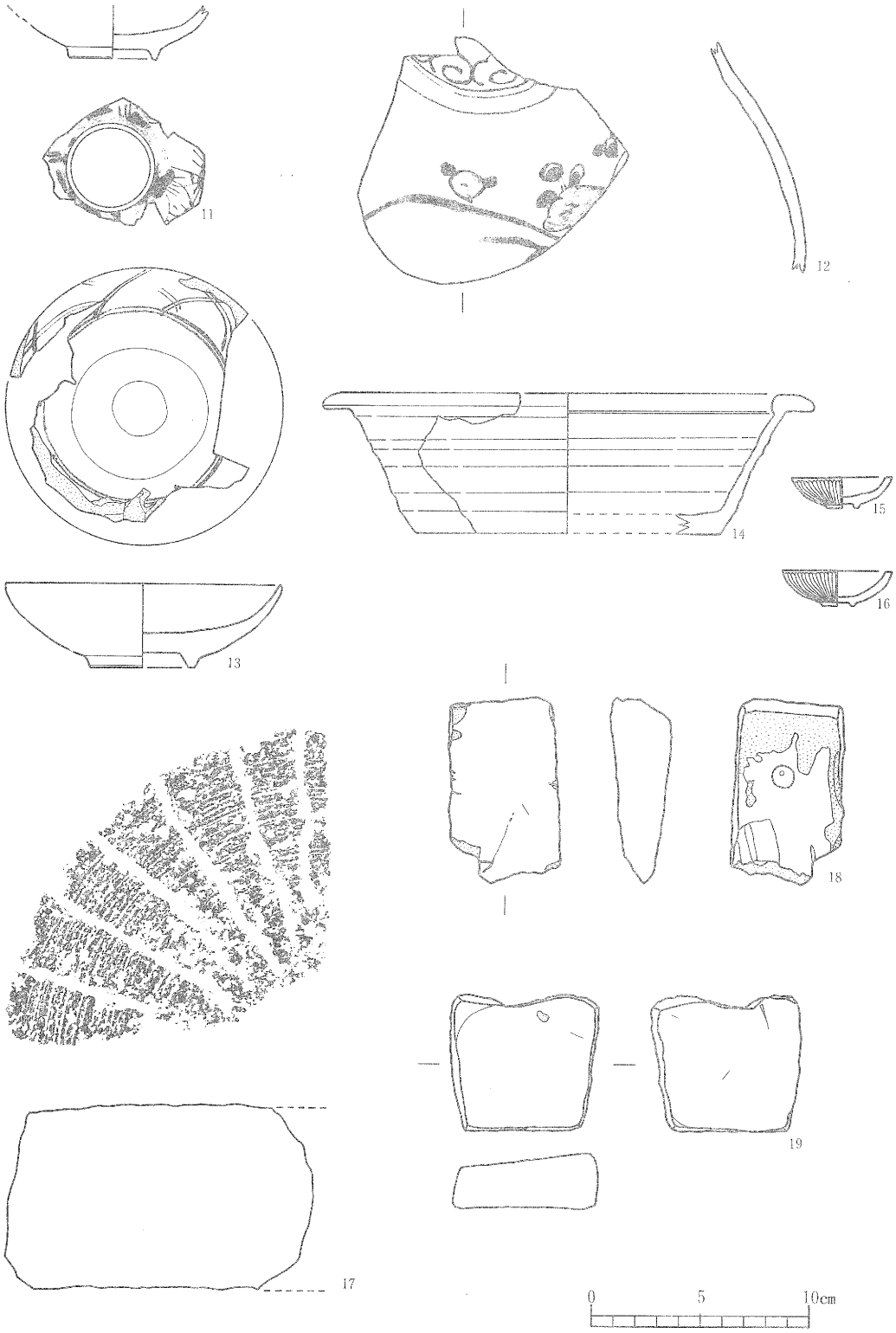
遺物は、施釉陶器(相馬大堀・唐津・瀬戸美濃ほか)、擂鉢(鉄釉・鉄化粧)、磁器(肥前ほか)、瓦質陶器、土製品、石製品、金属製品、古銭が出土している(第36～第38図)。



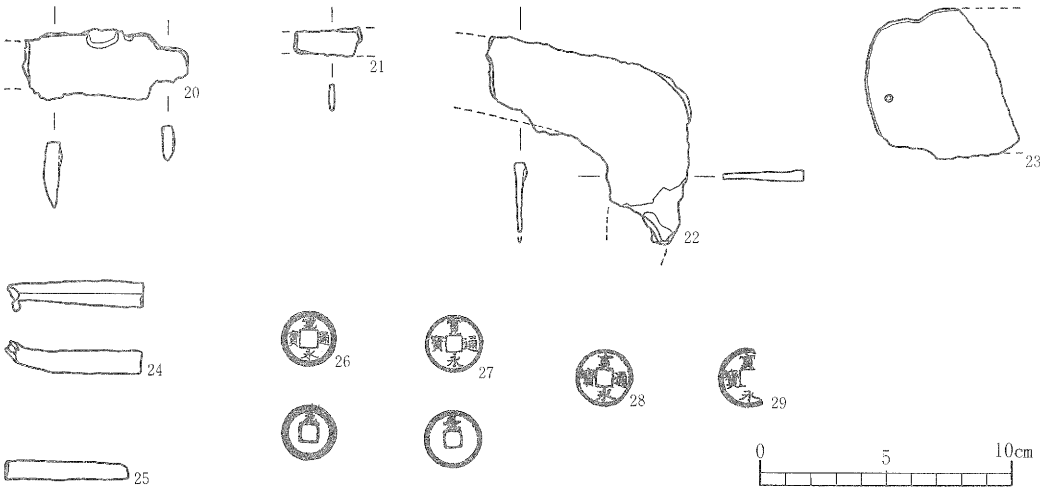
第36図　整地面出土遺物(陶器)(1)

No.	種別・器形	口径・底径・器高(cm)	産地	年代	特徴	図版
1	陶器・香炉	13.4・10.7・6.4	瀬戸美濃	18C.	黄瀬戸釉，菊花文，陰刻・丸ノミ彫	15－10
2	陶器・碗	10.6・4.5・5.0	産地不明	19C.	灰釉・土灰釉流し掛け	15－11
3	陶器・碗	――・4.8・――	唐津	18C.	灰釉	15－8
4	陶器・皿	12.0・2.8・2.6	唐津	17C.後半～18C.前半	青緑釉	15－9
5	陶器・燈明皿	――・3.6・――	産地不明	時期不明	鉄釉	15－12
6	陶器・擂鉢	――・12.0・――	産地不明	江戸	鉄化粧	16－5
7	陶器・擂鉢	――・――・――	産地不明	18C.以後	鉄釉	16－1
8	陶器・擂鉢	――・――・――	産地不明	17C.代	鉄釉	16－2
9	陶器・擂鉢	――・――・――	産地不明	18C.以後	鉄化粧	16－3
10	陶器・擂鉢	――・――・――	産地不明	江戸中期	鉄釉	16－4

第31表　整地面出土遺物(1)



第37図　整地面出土遺物(磁器・瓦質土器・石製品)(2)



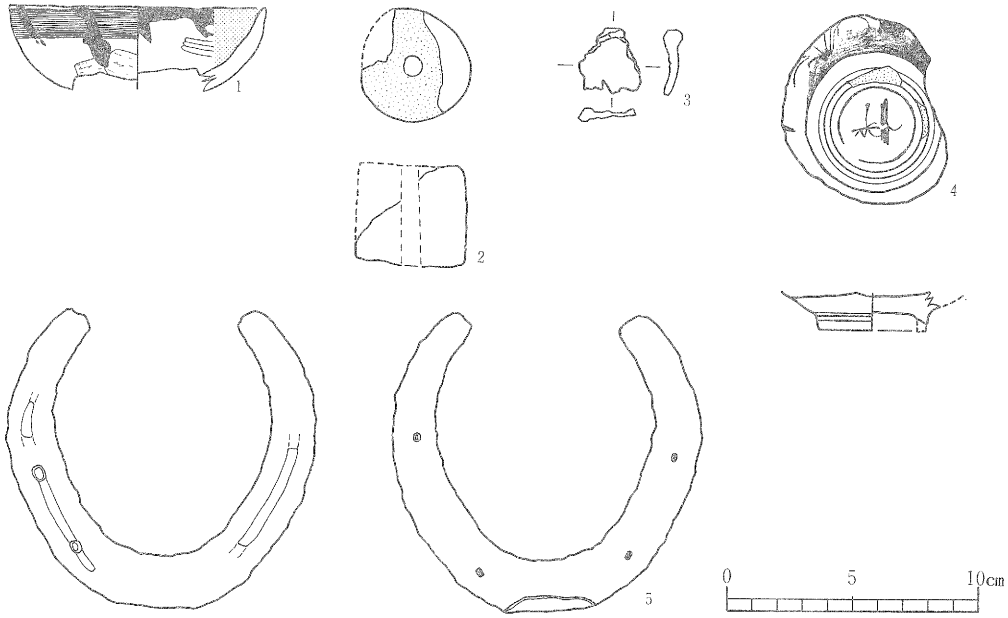
第38図　整地面出土遺物(金属製品・古銭)(3)

No.	種別・器形	口径・底径・器高(cm)	産地	年代	特徴	図版
11	磁器・碗	―― ・ 4.1 ・ ――	肥前	18 C.	染付	15－6
12	磁器・壺	―― ・ ―― ・ ――	肥前	18 C.	染付	15－7
13	磁器・皿	12.8 ・ 4.9 ・ 3.9	肥前	18 C.	染付、見込蛇の目釉剥ぎ	15－5
14	瓦質陶器・鉢	22.6 ・ 14.0 ・ 6.4	不明	不明		16－6
15	磁器・紅皿	4.6 ・ 1.5 ・ 1.4	不明	18 C. 以後	白磁・切込か	15－13
16	磁器・紅皿	5.0 ・ 1.5 ・ 1.6	不明	18 C. 以後	白磁・切込か	15－14
17	石製品・臼	残存長：15.2cm　厚：8.4cm		不明	粉挽き	16－7
18	石製品・砥石	長：8.4cm　幅：5.0cm　厚：2.7cm		不明		16－8
19	石製品・砥石	長：6.2cm　幅：6.8cm　厚：2.0cm		不明		16－9
20	金属製品・小刀	長：6.5cm　幅：2.6cm　厚：0.6cm		不明	鉄製	16－10
21	金属製品・不明	長：2.6cm　幅：1.1cm　厚：0.2cm		不明	鉄製	
22	金属製品・鎌	長：8.2cm　幅：3.2cm　厚：0.2cm		不明	鉄製	16－13
23	金属製品・不明	長：6.0cm　幅：5.9cm　厚：0.2cm		不明	鉄製	16－18
24	金属製品・煙管	長：5.4cm　幅：1.0cm		不明	銅製	16－11
25	金属製品・煙管	長：4.9cm　幅：0.8cm		不明	銅製、吸口	16－12
26	古銭・寛永通寶	直径：2.3cm	大阪	18 C.	新寛永、細字背元、初鋳年：寛保元年(1741)	16－17
27	古銭・寛永通寶	直径：2.4cm	長崎	18 C.	新寛永、背長、初鋳年：明和4年(1767)	16－16
28	古銭・寛永通寶	直径：2.4cm		17 C.	古寛永、坂本銭、初鋳年：寛永13(1636)	16－15
29	古銭・寛永通寶	直径：2.4cm		17 C.	古寛永、芝銭、初鋳年：寛永13年(1636)	16－14

第32表　整地面出土遺物(2)、(3)

(3)遺構外出土遺物

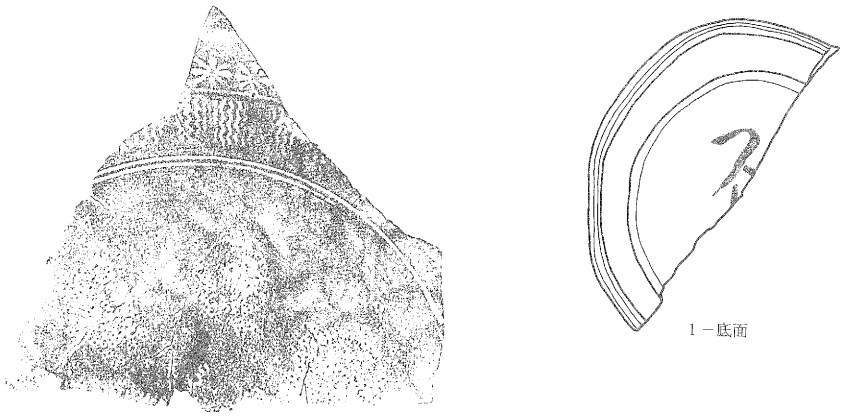
以上の遺構に伴って多数の遺物が出土したが、この他に基本層序、表面採取による出土遺物がある。調査区北側南斜面の基本層序Ⅲ層からは土師器、須恵器、土錘、調査区南西部緩斜面の基本層序Ⅲ層からは須恵器、金属製品が出土している。調査区南西部平坦面の基本層序Ⅰ層からは磁器(肥前)、金属製品が出土した。また土師器、須恵器、施釉陶器(相馬大堀・唐津・堤ほか)、磁器(肥前ほか)、土製品、石製品、石器、板碑が調査区内より表面採取された(第39～第41図)。

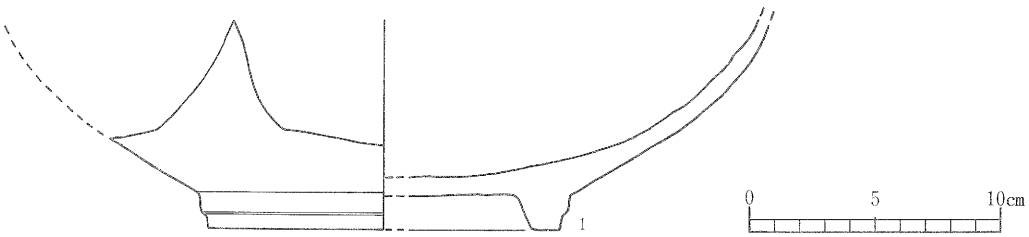


第39図　Ⅱ層・Ⅰ層出土遺物

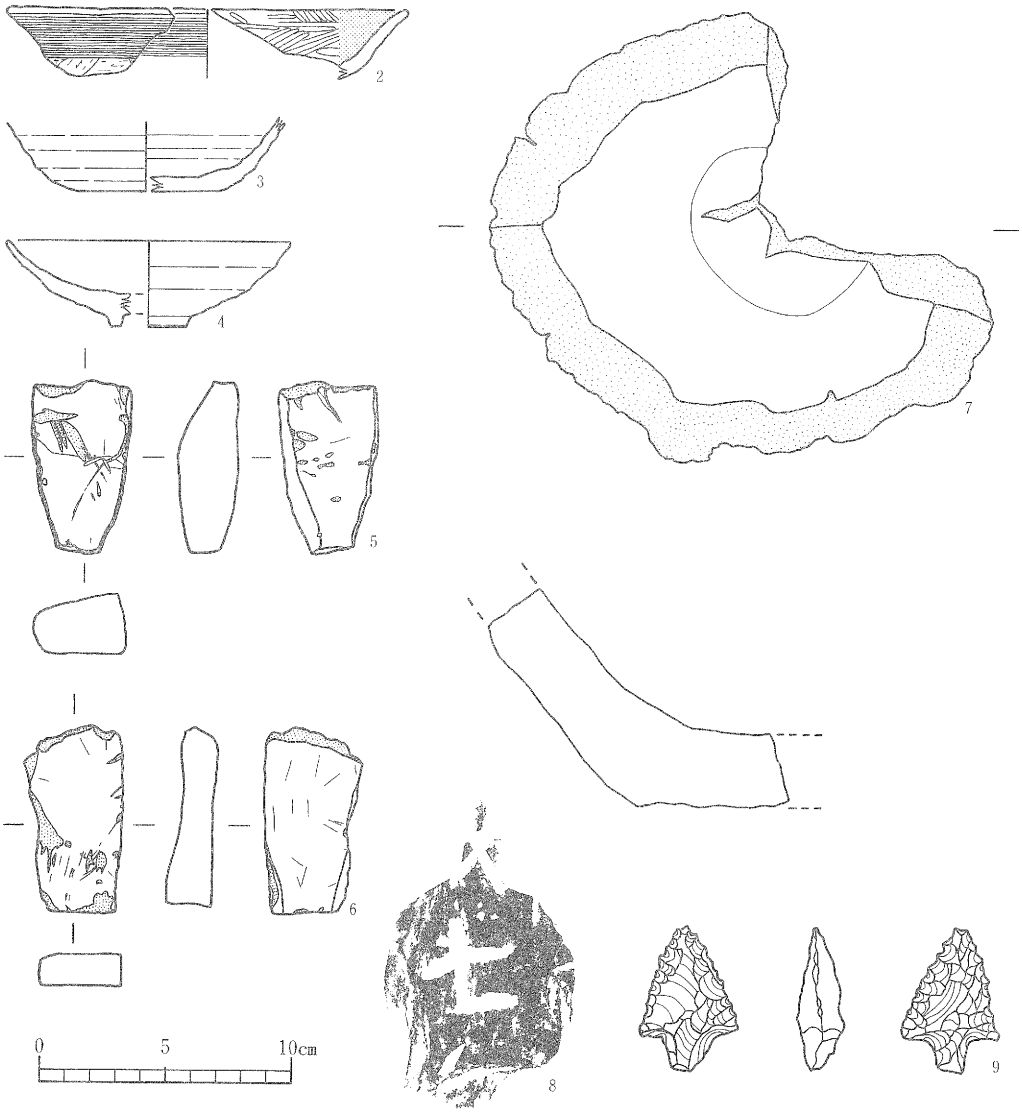
No	種別・器形	口径・底径・器高(cm)	産地	年代	特徴	図版
1	土師器 坏	10.3 ・ —— ・ ——	外面：ヨコナデ、ケズリ　内面：ヘラミガキ　内外両面に油煙付着、燈明用か			14－2－1
2	土錘	管玉：径4.5cm　高さ：4.0cm　重さ77.0g				14－2－2
3	金属製品・不明	長：2.6cm　幅：2.3cm　厚：0.3cm		不明		
4	磁器・碗	—— ・ 4.3 ・ ——	肥前	18 C.		17－1
5	金属製品・馬蹄	長：11.9cm　幅：14.2cm		明治以降	有孔式	17－2

第33表　Ⅱ層・Ⅰ層出土遺物





第40図　表採遺物(1)



第41図　表採遺物（2）

No.	種別・器形	口径・底径・器高(cm)	産地	年代	特徴	図版
1	施釉陶器・大鉢	――・12.0・――	唐津	17C.後半～18C.前半	象嵌、三島手、鉄化粧、底面に墨書「不」	17－3
2	土師器坏	16.0・――・――	外面：ヨコナデ・ケズリ　内面：ヘラミガキ・黒色処理			
3	須恵器坏	――・5.6・――	外面：ロクロナデ　内面：ロクロナデ　底部：回転糸切り			
4	磁器・皿	11.3・3.0・3.4	肥前	17C.後半～18C.前半	染付	
5	石製品・砥石	長：6.8cm　幅：3.9cm　厚：2.4cm		不明		17－5
6	石製品・石臼	残存高：8.7cm	不明	不明		17－8
7	石製品・砥石	長：7.4cm　幅：3.9cm　厚：1.3cm		不明		17－6
8	石製品・板碑	――	不明	不明	薬研彫	17－4
9	石製品・石鏃	長：1.9cm　幅：1.3cm　厚：0.6cm　重量：0.7g　素材：頁岩				17－7

第34表　表採遺物（1），（2）

Ⅴ．考察とまとめ

1．遺物と遺構

今回の調査によって出土した遺物は、大きく古代と近世に分けられる。そこで、古代の遺物を出土した遺構ごとに検討していく。

(1)住居跡

1号住居跡の床面及びカマド底面からは土師器坏、須恵器坏が出土している(第5図)。

土師器坏は、非ロクロ使用のものとロクロ使用のものである。非ロクロ使用のものは、外面体部上半にヨコナデ、体部下半にケズリ、内面上半にヨコナデ、下半にヘラミガキ、内面全面に黒色処理、底部にはケズリが施されている。口縁部には沈線を意識したくぼみが見られ、体部下半は内湾している。また、内外面に多量の油煙が付着している。同様の例は、仙台市六反田遺跡(佐藤洋：1987.3)、多賀城市市川橋遺跡(滝口卓：1990.3)等に見られる。外面への付着状況から、燈明皿として用いられたものと推定される。ロクロ使用のものは内外面ともロクロナデで、底部にはヘラケズリが施されている。口縁部には沈線を意識したくぼみが見られ、体部下半が内湾しながら口縁部に向かって急な角度で立ち上がる。内面には部分的に炭化物が付着している。地域的な特色をもたない、銅碗に近似した器形を呈している。このように銅碗に近似した器形を呈した坏は、古川市宮沢遺跡(斎藤・後藤：1985.3)、色麻町色麻古墳群上郷109号墳(藤沼・加藤：1985.3)、仙台市六反田遺跡(佐藤洋：前掲)、岩手県盛岡市志波城跡(盛岡市教育委員会：1980.3)、福島県郡山市広網遺跡(髙松・柳田ほか：1985.3)、福島県石川町梅木平遺跡(大河：福島ほか：1984.3)、福島県石川町谷地前C遺跡(玉川一郎ほか：1980.3)、福島県鹿島町真野古墳群小池8号墳(梅宮茂：1964)等から出土している。[註1] また、器形としては、平城宮Ⅴ(西弘海：1986.5)に分類されるものに近似している。須恵器坏はロクロ使用のもので、内外面ともロクロナデ、底部は回転糸切りが施されている。口縁部がやや強制的に外反し、体部下半がやや丸味を帯びている。薄手で赤変している。出土状況から考え、カマドの支脚として再利用されたものと推定される。

註1．銅碗に近似した器形の坏については、多賀城跡調査研究所村田晃一氏よりご教示を得た。

2号住居跡のカマド底面からは、赤焼き土器坏が出土している(第7図)。ロクロ使用のもので内外面ともロクロナデ、底部は回転糸切りが施されている。体部から口縁部に向かって逆台形状に直線的に立ち上がる。他に、ロクロ使用の土師器甕の破片が出土している。これらは、

出土状況から考え、カマドの支脚として再利用されたものと推定される。

3号住居跡の床面からは、ロクロ使用の土師器甕の破片が出土している。

また、1号住居跡では堆積土とカマド、3号住居跡では堆積土、周溝、内溝、柱穴に灰白色火山灰を含んでいる。

1号住居跡の土師器坏は、非ロクロ使用とロクロ使用のものが共伴している。近年の調査例では、多賀城市市川橋遺跡(石川俊英：1990.3)、同高崎遺跡(石川・相沢ほか：1987.3)で共伴が報告されている。高崎遺跡では、おおむね8世紀後半から9世紀初頭の年代が考えられている。1号住居跡では、遺物の特徴を考慮して、おおむね8世紀後半から9世紀前半頃までの年代が考えられる。

2号住居跡、3号住居跡は、資料数が不足しているが、製作にあたってロクロが使用される表杉ノ入期である。おおむね9世紀代で、1号住居跡に後続する年代が考えられる。

(2)竪穴遺構

1号竪穴遺構の周溝からは土師器甕、土錘が出土している(第10図)。土師器甕は、内面がヘラミガキ・黒色処理が施されている。外面は不明だが、体部はおそらくヘラケズリが施されているものと考えられる。

3号竪穴遺構の1層からは土師器坏が出土している(第12図)。外面体部上半にヨコナデ、体部下半にケズリ、内面にヘラミガキ、黒色処理が施されている。体部下半は逆台形状に立ち上がり、中央から上半部にかけてはやや丸味を持ちながら急に立ち上がる。

2号・4号・6号・7号竪穴遺構からも、周溝や貯蔵穴状ピットより土師器片が出土しているが、いずれも小片で磨滅が激しく、資料の点数も少なく、有効な資料とは言い難い。

また、3号・7号竪穴遺構と3号住居跡の間にはそれぞれ重複関係がある。その関係は、3号住居跡⟶3号竪穴遺構⟶7号竪穴遺構となる。3号住居跡は、おおむね9世紀代で、1号住居跡に後続する年代が考えられるため、3号竪穴遺構、7号竪穴遺構は、それぞれ3号住居跡、3号竪穴遺構に後続する年代が考えられる。1号竪穴遺構は、図示されていない土師器を含めた中で、1号住居跡と同じ時期またはややさかのぼるものと考えられる。2号・4号・5号・6号竪穴遺構については、他の1号・3号・7号竪穴遺構と同様の検出状況にあることから、1号・7号竪穴遺構の年代の中に入ってくるものと考えられる。

(3)3号土壙

3号土壙は須恵器甕の埋設遺構である(第21図)。須恵器甕は、外面口縁部～体部上半がロクロナデ、体部下半がロクロナデ、ヘラケズリ、内面口縁部～体部上半がロクロナデ、体部下半

がロクロナデ・ナデが施されている。口縁部は外反し、頸部が「く」字状に屈曲、体部上半の高い所に最大径をもつ。甕内部からは、人骨と推定される骨片が検出されている。同様の例として、多賀城市高崎遺跡(石川・相沢ほか：1987.3)、同山王遺跡(石川・相沢：1992.3)、仙台市下ノ内浦遺跡(渡部：1988.3)等が挙げられる。但し、前記のものは、いずれも土師器甕を用いて横位であるが、本遺構では須恵器甕を用いて立位である。蔵骨器[註2]の形態をとるものと推定されるが、蓋に相当する部分については不明である。1号住居跡と同じ、おおむね8世紀末から9世紀前半頃までの年代が考えられる。

註2．9世紀頃のものとしては、埼玉県宮林(大林)遺跡がある。この点については、多賀城市埋蔵文化財調査センター石川俊英氏にご教示いただいた。

(4) 1号井戸跡

1号井戸跡からは硯、相馬大堀産の碗、肥前産の染付皿、常滑？産の擂鉢等が出土している(第18図)。相馬大堀産の碗については、仙台市松木遺跡のⅣ期前半(工藤・佐藤ほか：1986.12)、仙台城三ノ丸跡のⅢ期（結城・佐藤ほか：1985.3）に相当する。また、肥前産の染付皿は見込蛇の目釉剥ぎで、高台から体部下半は浅い角度で、体部上半は急な角度で立ち上がる。仙台市松木遺跡のⅣ期前半に相当する。硯は雄勝産で、クリ彫によるものである。石材である玄昌石の剥離し易い性質を防ぐために、硯は漆仕上げされる。しかし、この硯は漆仕上げされておらず墨痕も確認されなかったことから、硯としては未製品であると考えられる。磨滅の状況から、砥石に転用されたものと推定される。ウラには「享保拾七子」(1732)とあり、前記の出土遺物と併せて、これらは18世紀代のものと推定される。これらの状況により、1号井戸跡は、おおむね18世紀から19世紀前半にかけての年代が考えられる。

(5) 5号土壙

5号土壙からは寛永通寶、鉄鍋、煙管等が出土している(第22図)。寛永通寶は新寛永で、寛文8年(1668)以降に鋳造されたものである。鉄鍋を伴う墓壙の例としては、大和町日光山遺跡(藤沼・白鳥ほか：1981.6)が挙げられる。上部に存在したと推定される墓碑には天明4年(1784)の紀年銘がある。

(6) 3号・4号溝跡

3号溝跡からは肥前産の碗・皿、金属製品が出土している(第35図)。他に相馬大堀産の碗、唐津産の皿等の破片が出土している。肥前産の碗は、くらわんか手と呼ばれるもので、外面に梅樹文がある。同様のものは、仙台城三ノ丸跡、松山町上野館跡(手塚・佐久間：1992.3)等に

層位	種別 / 産地・器種 / 年代	陶器																							
		堤・小壷	堤・擂鉢	相馬大堀・碗	相馬大堀・掛分け碗	相馬大堀・皿	相馬大堀・器種不明	常滑？・擂鉢	瀬戸美濃・碗	瀬戸美濃・染付碗	瀬戸美濃・皿	瀬戸美濃・香炉	唐津・碗	唐津・皿	唐津・瓶類	唐津・大鉢	唐津・器種不明	産地不明・碗	産地不明・染付碗	産地不明・壺	産地不明・小型甕類	産地不明・染付鉢	産地不明・擂鉢	産地不明・燈明皿	産地不明・器種不明
1号井戸	17C.～18C.																						2		
	18C.後半			1																					
	18C.後半～19C.前半				1																				
	年代不明							1																	
3・4号溝	17C.後半													3		1									
	17C.後半～18C.前半																								
	18C.														1								3		
	18C.以後			11		1	1										1	1			1	1			
	幕末～明治			1																					
土7号壙	18C.以後										1														
整地面	17C.代																						1		
	17C.～18C.								2			2	6					2	4		3	10	4		
	18C.																			1					
	18C.？																						1		
	江戸中期																						5		
	18C.以後			3						1								1					13		
	18C.後半以降			8																					
	江戸																								
	19C.																	1				1			
	幕末～明治			2																					
	明治以降																	2							
	年代不明																	2						1	1 2
表採	17C.or～17C.代																						3		
	17C.？												1												
	17C.後半～18C.前半															2									
	18C.												6		1					1			4		
	18C.以後	1		1																		5	3		
	江戸																								
	幕末～明治		1	1																					
	明治～大正																	1							
	年代不明																			1					

第35表　群田遺跡出土陶磁器年代・産地・器種別集計表（1）

層位	種別 / 産地・器種 / 年代	磁器												瓦質陶器・鉢	瓦質陶器・火鉢	土師質陶器・火鉢
		肥前・染付碗	肥前・網目碗	肥前・丸紋碗	肥前・染付皿	肥前・壺	肥前・染付壺	肥前・染付瓶類	肥前・紅皿	肥前・器種不明	産地不明・碗	産地不明・紅皿	産地不明・仏飯具			
井1戸号	18C.				1										3	
号3・溝4	18C.	3	1	2	6											5
整地面	18C.	4	2	1	3		1	1		2			1		1	
	18C.？															
	18C.以後										1	2				
	18C.後半				1											
	年代不明													1		
Ⅰ層	18C.	1														
表採	17C.後半～18C.前半				1											
	18C.	1	1		1	1	1		1							
	18C.以後													1		
	年代不明															

第36表
群田遺跡出土陶磁器年代・
産地・器種別集計表（2）

出土例が見られる。肥前産の染付皿は、1号井戸跡と同様のものである。他に肥前産の丸紋碗、網目碗の破片が出土しているが、これらは18世紀代のものと考えられる。また、前記の皿については、1号井戸跡出土の破片と接合関係にある。これらの状況より、3号溝跡は、おおむね18世紀から19世紀前半にかけての年代が考えられる。また、3号溝跡と同様に整地面を区画する性格を有する4号溝跡は、3号溝跡と重複する部分において新旧関係が見られないこと、底面付近で出土した擂鉢が18世紀代のものであることから、3号溝跡と同様の年代が考えられる。

(7)整地面

①出土遺物

整地面からは相馬大堀産の碗、唐津産の碗・皿、瀬戸美濃産の香爐、肥前産の碗・皿・壷、産地不明の陶器、磁器、寛永通寶が出土している(第36・37・38図)。唐津産の碗については、仙台城三ノ丸跡のⅢ期[註3]に相当する。同じく皿は見込蛇の目釉剥ぎで、内面青緑釉である。肥前陶器のⅣ期[註4]、仙台城三ノ丸跡のⅡ期終末[註5]からⅢ期にかけての時期に相当する。瀬戸美濃産の香爐は、外面及び内面口縁部が黄瀬戸釉で、筒形を呈する。口唇部はやや外面に張り出し、外面体部下半に菊花文(陰刻・丸のみ彫)、底部は3足付である。『尾張陶磁』(井上喜久男：1992.5)の登窯Ⅲ期[註6]時期以降、おおむね18世紀代のものと考えられる。擂鉢は鉄釉または鉄化粧で、おろし目の間隔が開くものと閉じるものがある。産地は特定できないが、17世紀代と18世紀代のものと考えられる。肥前産の染付碗は体部に草花文を有し、仙台城三ノ丸城Ⅲ期に相当する。染付皿は見込蛇の目釉剥ぎで、高台から体部下半は浅い角度で、体部上半は急な角度で立ち上がる。肥前磁器(大橋康二：1989.10)のⅣ期[註7]、仙台市松木遺跡Ⅳ期前半[註8]に相当する。染付壷(あるいは瓶)は、外面頚部に唐草文、体部上半に三重の圏線、体部には梅樹あるいは草花を意図した文様がある。同様の出土例は、松山町上野館跡に見られる。肥前磁器のⅣ期に分類される特徴を有し、おおむね18世紀代のものと考えられる。寛永通寶は4点出土している。2点は古寛永(芝銭・坂本銭)で、ともに寛永13年(1636)以降に鋳造されたものである。他の2点は新寛永である。大阪で鋳造された細字背元は寛保元年(1741)以降、長崎で鋳造された背長は明和4年(1767)以降鋳造されたものである。

註3．仙台城三ノ丸跡Ⅲ期は、18世紀代の推定実年代が当てられている。

註4．肥前陶器のⅣ期については、1690年～1780年代(元禄～天明年間)の推定実年代が当てられている。

註5．仙台城三ノ丸跡Ⅱ期終末は、17世紀後半の推定実年代が当てられている。

註6．『尾張陶磁』の登窯Ⅲ期には、1655～1687年(明暦～貞享年間)の推定実年代が当てられている。

註7．肥前磁器のⅣ期については、1690～1780年代(元禄～天明年間)の推定実年代が当てられている。

註8．仙台市松木遺跡Ⅳ期前半については、18世紀～19世紀前半の推定実年代が当てられている。

②整地面の性格

整地面は、調査区南西部の急斜面から緩斜面に切り替わる部分の基本層序Ⅲ層及びⅣ層の一部を削平し、Ⅲ層上に盛土して造られた面である。その面積は、約700㎡である。（第34図）。最高所と最低所では１ｍ以上のレベル差が見られるが、なだらかに下る通路状の所であるため、この箇所を除いたレベル差は60㎝前後となる。また、３号・４号溝跡によって「コ」字状に区画されている箇所に限定すれば、面積は約560㎡で、レベル差は30㎝前後となり、ほぼ平らであることが分かる。

この整地面上には、１号井戸跡、３号・４号溝跡、７号・８号・９号土壙、ピット群が存在する。これらの遺構は、削平されたⅢ層及びⅣ層上に掘り込まれたもの、盛土によって造られた面に掘り込まれたもの、双方にまたがるものに分けられる。それは以下のようになる。

・削平されたⅢ層及びⅣ層上に掘り込まれたもの……１号井戸跡、７号・８号土壙、ピット群

・盛土によって造られた面に掘り込まれたもの……９号土壙

・双方にまたがって掘り込まれたもの……３号・４号溝跡

９号土壙は、確認面が盛土によって作られた面であることから、整地面造成後に掘り込まれたものと推定される。１号井戸跡も断面形や堆積土の状況から、整地面造成後に掘り込まれたものと推定される。また、１号井戸跡、３号溝跡、整地面は、遺構間で遺物が接合する。また、前項①によって、整地面の年代は17世紀末～19世紀前半と推定されるが、この年代幅の中に収まる遺構には、１号井戸跡、７号・９号土壙、３号・４号溝跡がある。８号土壙、ピット群については時期不明である。

種別／器種	陶器		磁器		計	
	点数	比率(%)	点数	比率(%)	点数	比率(%)
碗	52	36.36	17	42.50	69	37.70
皿	5	3.50	13	32.50	18	9.84
甕	20	13.98	0	0.00	20	10.93
壺	4	2.80	3	7.50	7	3.82
瓶	2	1.40	1	2.50	3	1.64
鉢	4	2.80	0	0.00	4	2.18
擂鉢	40	27.97	0	0.00	40	21.86
火鉢	9	6.29	0	0.00	9	4.92
燈明皿	1	0.70	0	0.00	1	0.55
紅皿	0	0.00	3	7.50	3	1.64
仏飯具	0	0.00	1	2.50	1	0.55
香爐	2	1.40	0	0.00	2	1.09
不明	4	2.80	2	5.00	6	3.28
計	143	100.00	40	100.00	183	100.00

第37表　整地面出土陶磁器器種別構成比率
（幕末～明治，明治以降を除く）

以上により、整地面は３号溝跡及び４号溝跡によって区画され、１号井戸跡、７号土壙、９号土壙を伴う生活面であることが推定される。また、表面採取や基本層序Ⅰ層、整地面上にある遺構を含めた地点から出土した陶磁器の比率を見ると、日用雑器が大半を占めることが分かる。この構成比率や遺物の出土状況から日常的な生活の場が存在した可能性が考えられる。しかし、日常的な生活の場を形成するであろう建物跡のものと推定される柱穴は、今回の調査では検出されなかった。

整地面検出地点の調査前の現況は山林であったが、それ以前は畑として使用されていた。当時、畑の所有者であった鹿野竹二郎によれば、畑を耕す際に障害となる数個の大石を除去して

墓(5号土壙)の近くに移動した、とのことである。その大石は、確認の際、存在が確かめられている。このことにより整地面には柱根を直接土中に埋める掘立柱の建物ではなく、石の上に柱を据える通称「石場建」と呼ばれる建物が存在した可能性を考えておきたい。

また、「風土記御用書上」(『河南町誌』下)には「一．屋敷名　三十六……一．郡田屋敷　弐軒」とある。「風土記御用書上」は、藩内各村々の肝入に命じ、あるいは知行所単位で書き上げ提出させたもので、安永2年(1773)から始まり、全て提出完了したのは同九年(1780)である。これは、整地面が使用された推定年代17世紀末～19世紀前半の中に収まるものである。そこで、今回の調査によって検出された整地面上には、その中の一軒が存在していた可能性を考えておきたい。

(8)遺構外出土遺物

基本層序Ⅲ層からは非ロクロ使用の土師器坏が出土している。外面体部上半にヨコナデ、体部下半にヘラケズリ、内面にヘラミガキ、黒色処理が施されている。底部は損われているが、内外面とも多量の油煙が付着しており、1号住居跡出土の土師器坏と同様に燈明皿として用いられたものと考えられる。また図化できなかったものの、内外面に油煙の付着した土師器坏は、もう1点出土している。出土地点も1号住居跡に近く、何らかの関係が考えられる。

基本層序Ⅰ層からは肥前産の染付碗が出土している(第39図)。体部に草花文、高台に二重の圏線、底部には底裏銘(読解できず)を有する。肥前磁器のⅣ期に相当する特徴を有し、おおむね18世紀代のものと考える。

表面採取されたものの中には唐津産の大鉢(第40図)、肥前産の染付皿(第41図)がある。唐津産の大鉢は三島手と呼ばれるもので、外面は鉄化粧、内面は灰釉で段花文等の象嵌手法による陰刻が施され、窯詰めの際に用いられる砂目の痕跡が認められる。底部には墨書が認められるが、読解できなかった。仙台城三ノ丸跡のⅡ期終末に相当する。肥前産の染付皿は、見込蛇の目釉剥ぎで、高台から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がる。仙台城三ノ丸跡のⅡ期終末からⅢ期にかけての時期に相当する。その他に唐津産の碗、産地不明の擂鉢(第35表)、肥前産の丸紋碗(第36表)等が表面採取されている。

上記のⅠ層及び表面採取の遺物については、全て整地面のある南西部平坦面から出土している。これらは、整地面が生活面として機能したと推定される17世紀末～19世紀前半までの年代幅の中に収まる。平坦面が畑として使用されていたことを考慮すれば、畑を耕した際に堆積土に混入あるいは地表に表れたものと考えられる。

2．まとめ

群田遺跡の発掘調査によって、以下のことがわかった。

(1)　群田遺跡は、縄文、古墳、奈良、平安、中世、近世にわたる複合遺跡である。

(2)　8世紀末～9世紀代の古代の集落跡が検出された。

(3)　近世（17世紀末～19世紀前半）の生活面が検出された。

(4)　古代及び近世の埋葬遺構が検出された。

(5)　古代の集落跡からは、銅碗に近似した土師器が出土しており、銅碗について何らかの知識をもつ者がいた。

(6)　近世の生活面から出土した陶器・磁器の器種構成からみて、一般的な農民層・町民層とは区別して考えた方がよいものと思われる。

(7)　近世の生活面からは、陶器、磁器、石製品等が出土した。これらの大半は、仙台城三ノ丸跡、仙台市松木遺跡、松山町上野館跡で年代がわかっているものである。今回の調査では、実年代のわかる資料を共伴しており、前記の遺跡での成果を裏付ける資料となった。

(8)　調査区南西部平坦面は、調査区へ向かって続いており、遺跡の範囲は南側に向かって延びるものと推定される。

引用・参考文献（五十音順）

石井・柳沢（1982.3）：「松島地域の地質」『地域地質研究報告』　通商産業省工業技術院地質調査所

石川俊英（1990.3）：「市川橋遺跡」『多賀城市文化財調査報告書第21集』　多賀城市教育委員会

石川・相沢（1992.3）：「山王遺跡ほか」『多賀城市文化財調査報告書第29集』　多賀城市教育委員会

石川・相沢ほか（1987.3）：「高崎遺跡」『多賀城市文化財調査報告書第12集』　多賀城市教育委員会

伊東信雄（1955）：「宮城県加美郡上郷古墳群」『日本考古学年報』8　日本考古学協会

伊東信雄（1957.3）：「古代史」『宮城県史』第1巻　宮城県

井上喜久男（1992.5）：『尾張陶磁』　ニュー・サイエンス社

梅宮茂（1964）：『福島県史』第6巻　福島県

大河・福島ほか（1984.3）：「梅木平遺跡　母畑地区遺跡発掘調査報告15」『福島県文化財調査報告書第131集』
福島県教育委員会・㈶福島県文化センター

大橋康二（1989.10）：「肥前陶磁」『考古学ライブラリー55』　ニュー・サイエンス社

小山・竹原（1987.1）：「新版標準土色帖」　日本色研事業株式会社

河南町（1971.3）：「風土記御用書上」『河南町誌』下　河南町

工藤・佐藤（1986.12）：「柳生」（松木遺跡）『仙台市文化財調査報告書第95集』　仙台市教育委員会

斎藤・後藤（1985.3）：「古川市宮沢遺跡」『宮城県文化財調査報告書第105集』　宮城県教育委員会

佐藤敏幸（1991.3）：「御塩蔵場跡」『河南町文化財調査報告書第5集』　河南町教育委員会

佐藤敏幸（1992.2）：『第18回古代城柵官衙遺跡検討会資料』

佐藤洋（1987.3）：「六反田遺跡Ⅲ」『仙台市文化財調査報告書第102集』　仙台市教育委員会

佐藤雄一（1986.11）：「6板碑」『わがまち河南の文化財』　河南町教育委員会

清水東四郎（1924.12）：「中山柵址（佳景山）（桃生郡史跡）」「宮城県史蹟名勝天然記念物調査報告」2

白鳥・手塚（1992.3）：「上野館跡（Ⅲ）」『宮城県文化財調査報告書第149集』　宮城県教育委員会

鈴木省三（1924.12）：「中山柵」『宮城県史蹟名勝天然記念物調査報告』1

高橋・阿部（1987.3）：「須江糠塚遺跡」『河南町文化財調査報告書第1集』　河南町教育委員会

高松・柳田ほか（1985.3）：「広網遺跡発掘調査概報」　郡山市教育委員会
㈶郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団

滝口卓（1990.3）：「市川橋遺跡」『多賀城市文化財調査報告書第24集』　多賀城市教育委員会

玉川一郎ほか（1980.3）：「谷地前C遺跡　母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅴ」『福島県文化財調査報告書第85集』
福島県教育委員会・㈶福島県文化センター

戸田有二（1987.12）：「柚原古墳群」『鹿島町文化財調査報告書第6集』　鹿島町教育委員会

中野・佐藤（1990.3）：「須江関ノ入遺跡」『河南町文化財調査報告書第4集』　河南町教育委員会

中野裕平（1991.12）：「平成3年度宮城県発掘調査遺跡発表会資料」

西弘海（1986.5）：『土器様式の成立とその背景』真陽社

日本貨幣商協同組合（1993.1）：「日本貨幣型録」1993年版

藤沼・加藤ほか（1985.3）：「色麻古墳群－色麻町香ノ木遺跡・色麻古墳群」『宮城県文化財調査報告書第103集』
宮城県教育委員会

藤沼・白鳥ほか（1981.6）：「日光山遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ」『宮城県文化財調査報告書第81集』
宮城県教育委員会

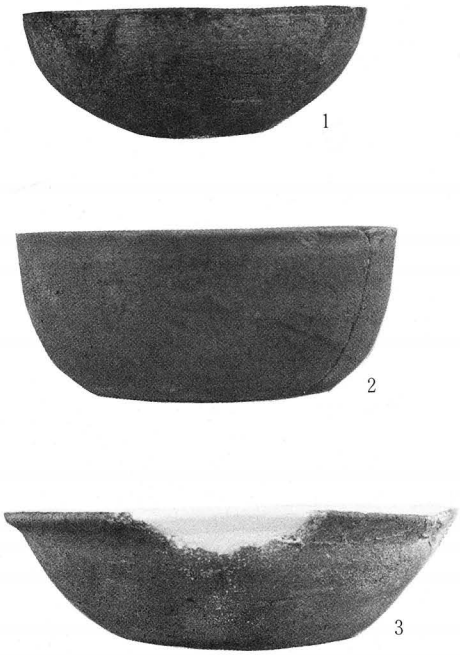
藤沼・小井川ほか（1989.3）：「宮城県の貝塚」『東北歴史資料館資料集』25　東北歴史資料館
松本彦七郎（1919.5）：「陸前国宝ケ峯遺跡の分層的小発掘成績」『人類学雑誌』34の5
松本彦七郎（1919.9）：「宝ケ峯遺跡について」『考古学雑誌』第9巻第9号
宮城県教育委員会（1988.1）：「宮城県遺跡地図」『宮城県文化財調査報告書第125集』
宮城県教育委員会
三宅・進藤ほか（1987.3）：「赤井遺跡第1次発掘調査報告」『矢本町文化財報告書第1集』
矢本町教育委員会
盛岡市教育委員会（1980.3）：『志波城跡』　盛岡市教育委員会
結城・佐藤ほか（1985.3）：「仙台城三ノ丸跡」『仙台市文化財調査報告書第96集』　仙台市教育委員会
渡部紀（1988.3）：「下ノ内浦遺跡」『仙台市文化財調査報告書第115集』　仙台市教育委員会
―――（1971.）：「仙台領内古城書上」『仙台叢書』別巻

写 真 図 版

図版１－１　群田遺跡調査区全景

図版１－２　Ⅱ層上面完掘状況

図版２－１　１号住居跡完掘状況

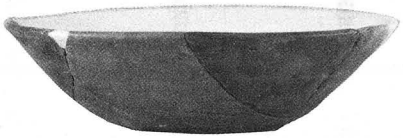


図版２－２　１号住居跡出土遺物

図版２－３　１号住居跡遺物出土状況

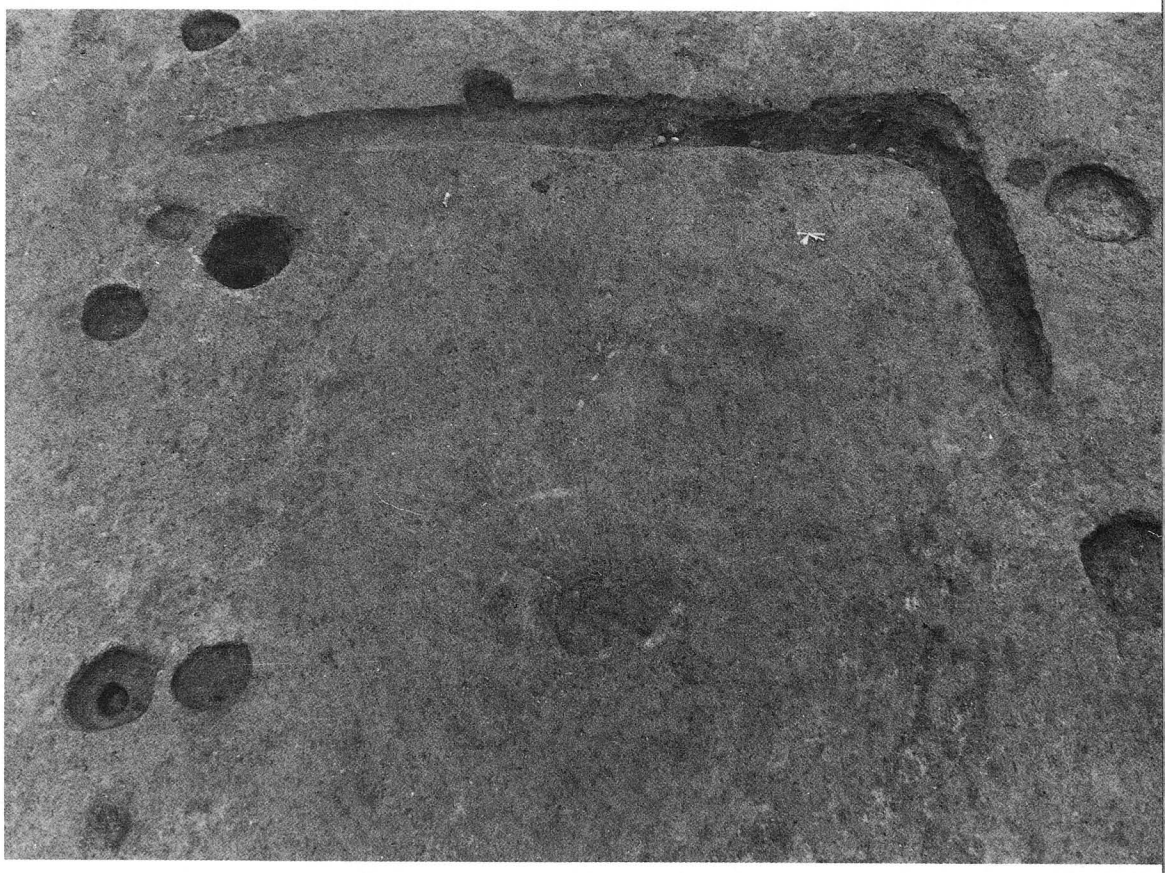
図版３－１　２号住居跡完掘状況

図版３－２　３号住居跡完掘状況

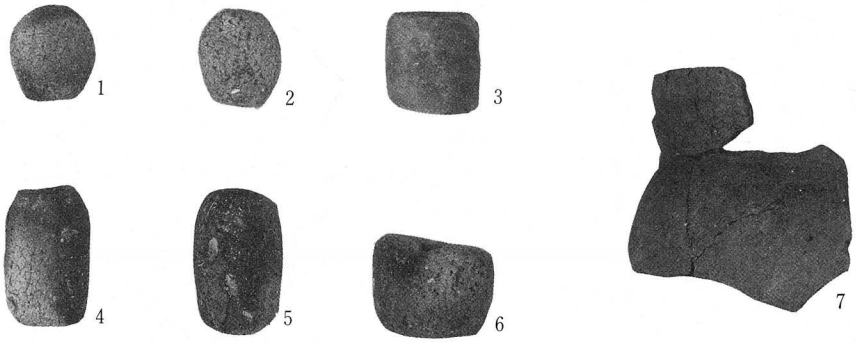


図版４－２　２号住居跡出土遺物

図版４－１　２号住居跡遺物出土状況



図版４－３　１号竪穴遺構完掘状況



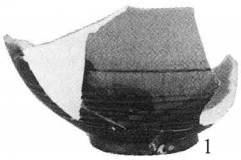
図版４－４　１号竪穴遺構出土遺物

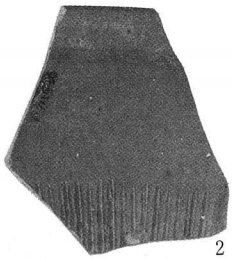
図版５－１　３号・７号竪穴遺構完掘状況

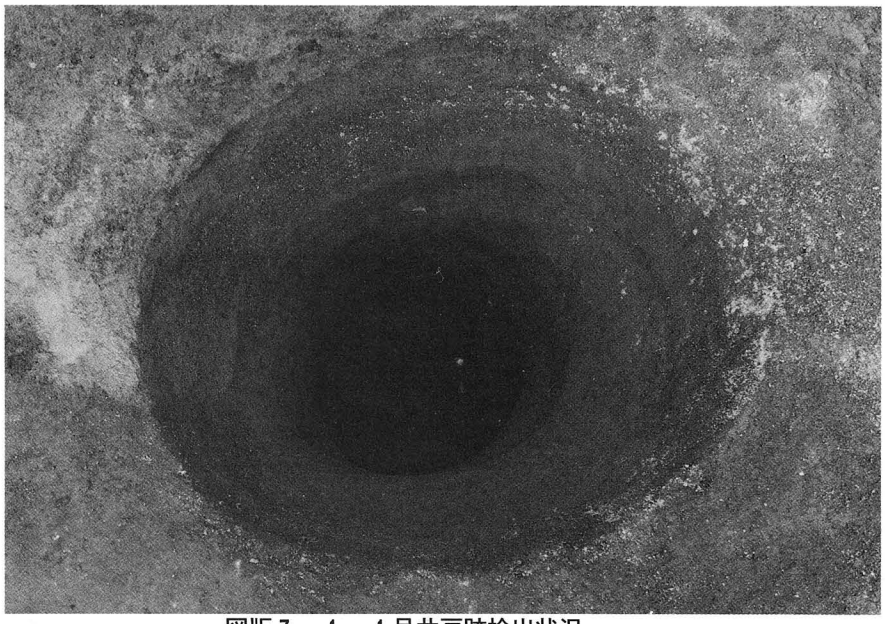
図版５－２　４号竪穴遺構完掘状況

図版６－１　５号竪穴遺構完掘状況

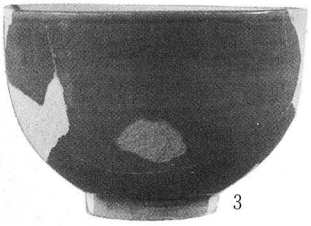
図版６－２　６号竪穴遺構完掘状況

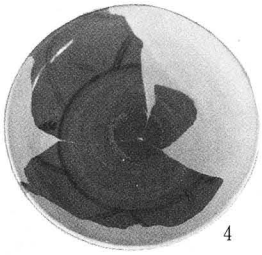

1

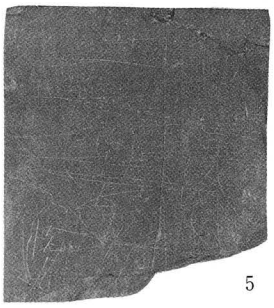

2



図版７－１　１号井戸跡検出状況

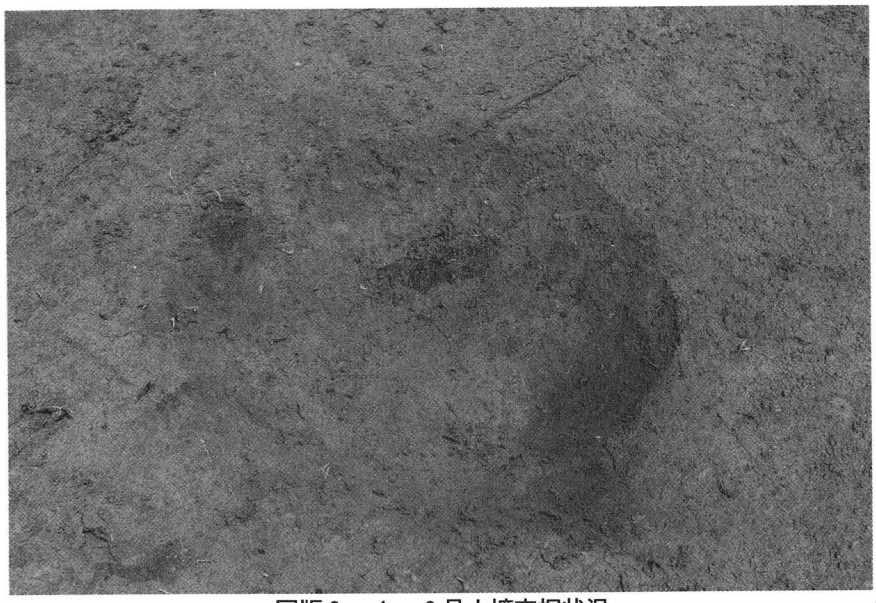

3


4


5

図版７－２　１号井戸跡出土遺物

図版７－３
１号土壙完掘状況

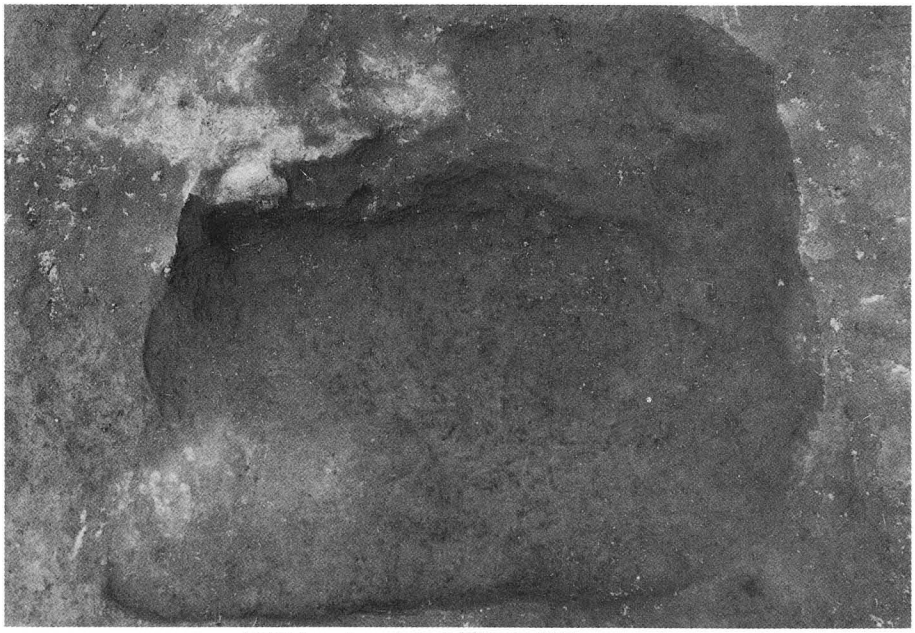


図版８－１　２号土壙完掘状況

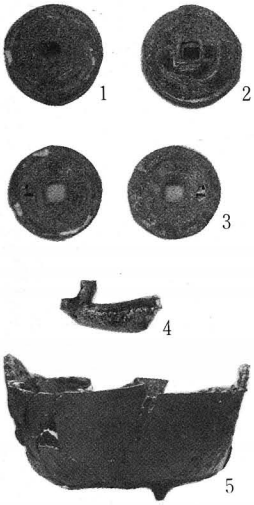
図版８－２
３号土壙出土遺物

図版８－３　３号土壙完掘状況

図版８－４　３号土壙確認面



図版９－１　４号土壙完掘状況



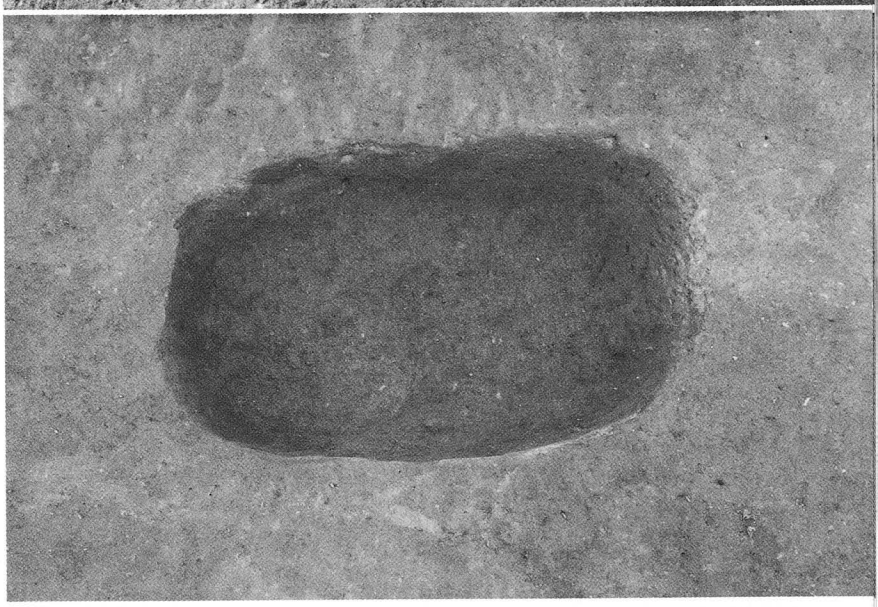
図版９－２
５号土壙出土遺物

図版９－３　５号土壙完掘状況

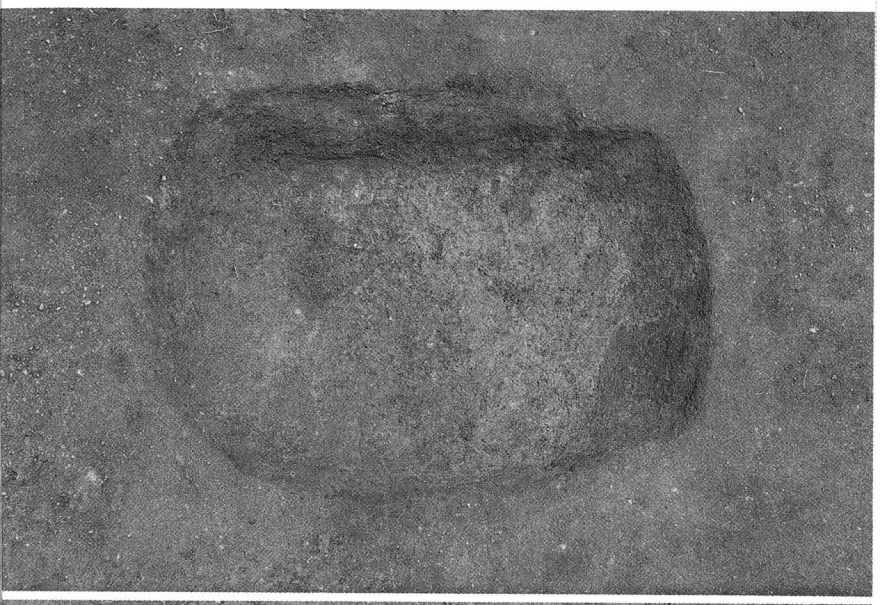
図版９－４　５号土壙遺物出土状況

図版10－1
6号土壙完掘状況

図版10－2
7号土壙完掘状況



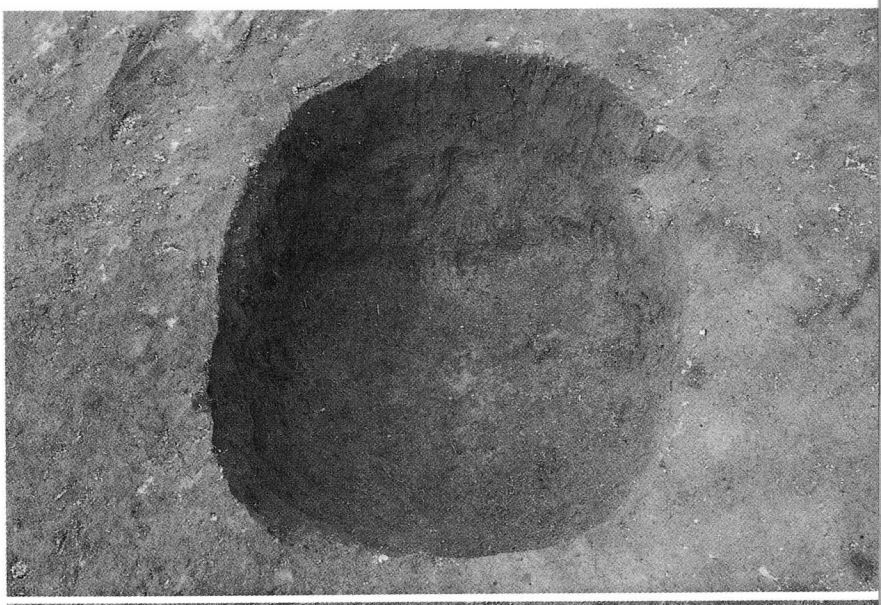
図版10－3
8号土壙完掘状況



図版11－1
9号土壙完掘状況

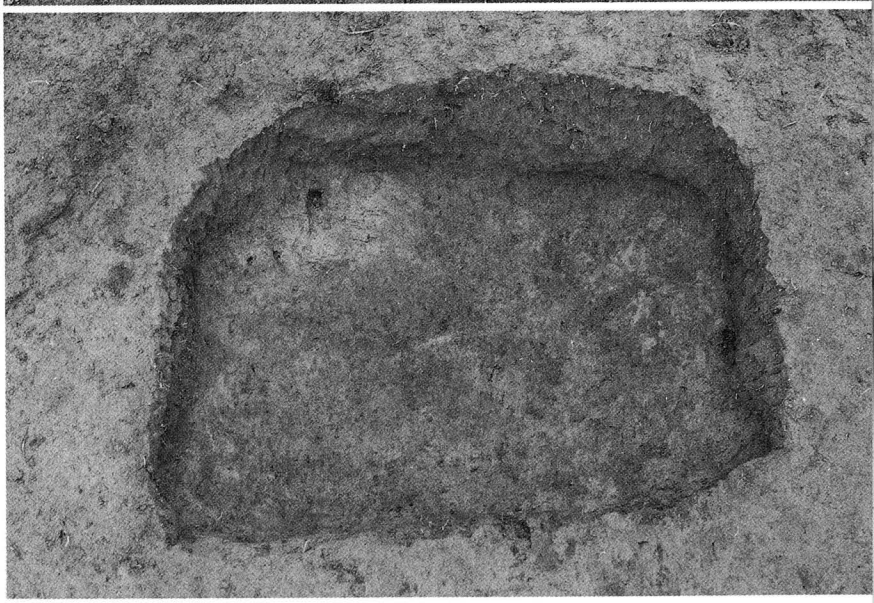
図版11－2
1号焼土遺構完掘状況

図版11－3
2号焼土遺構完掘状況



図版12－1
3号焼土遺構完掘状況

図版12－2
4号焼土遺構完掘状況



図版12－3
5号焼土遺構完掘状況

図版13－1
6号焼土遺構完掘状況

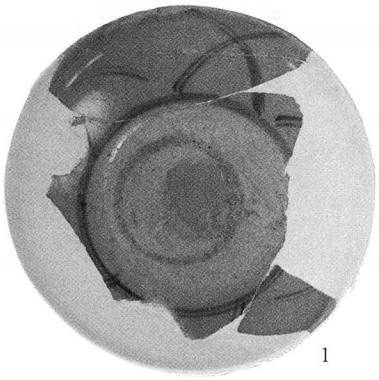
図版13－2
7号焼土遺構完掘状況

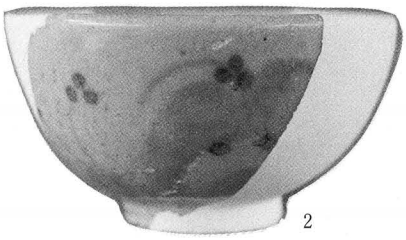
図版13－3
7号焼土遺構側壁工具痕

図版14－2
2号溝跡・ピット群

図版14－2
Ⅲ層出土遺物

図版14－3
調査区南西部緩斜面
完掘状況

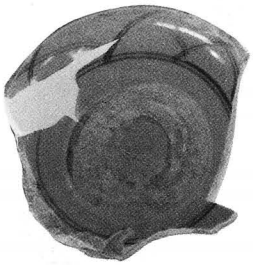

1


2

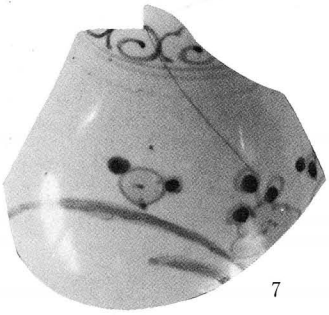
3

4

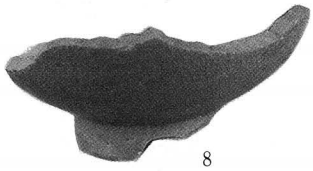
図版15　3号溝出土遺物


5

6

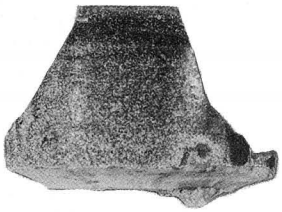

7

図版15　Ⅱ層出土遺物(肥前)

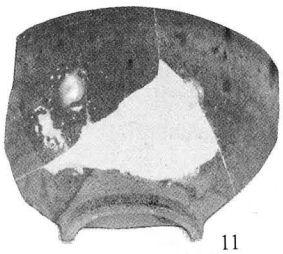

8

9

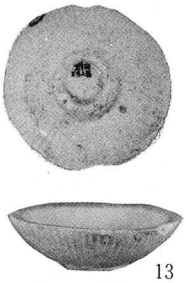
図版15　Ⅱ層出土遺物(唐津)

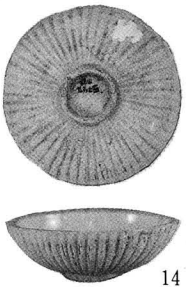

10

図版15　Ⅱ層出土遺物(瀬戸美濃)


11

12


13


14

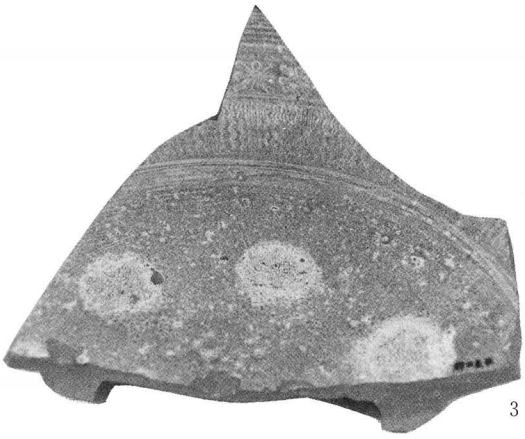
図版15　Ⅱ層出土遺物(産地不明)

Ⅱ層出土遺物(陶器，瓦質土器，石製品，金属製品，古銭)

1

2

Ⅰ層出土遺物



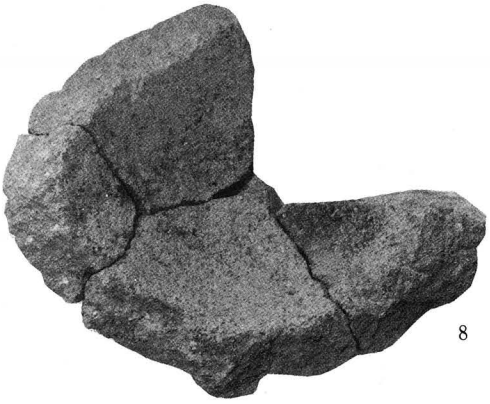
3

4

5

6

7



8

河南町文化財関係出版物

『わがまち河南の文化財』昭和61年11月　P.1～201

『河南町文化財調査報告書』第1集「須江糠塚遺跡」昭和62年3月　P.1～110

『河南町文化財調査報告書』第2集「須江関ノ入遺跡詳細分布調査報告書」昭和63年3月　P.1～27

『河南町文化財調査報告書』第3集「須江関ノ入遺跡詳細分布調査Ⅱ」平成元年3月　P.1～25

『河南町文化財調査報告書』第4集「須江関ノ入遺跡―工業団地造成に伴う発掘調査概報」平成2年3月　P.1～67

『河南町文化財調査報告書』第5集「御塩蔵場跡―発掘調査報告書―」平成3年3月　P.1～21

『河南町文化財調査報告書』第6集「須江窯跡群　代官山遺跡」平成5年3月　P.1～108

『河南町文化財調査報告書』第7集「須江窯跡群　関ノ入遺跡」平成5年3月　P.1～230

『河南町文化財調査報告書』第8集「群田遺跡」平成5年3月　P.1～72

河南町文化財調査報告書　第8集

群田遺跡

発掘調査報告書

平成5年3月29日　印刷
平成5年3月31日　発刊

発行　河南町教育委員会
〒987-11　宮城県桃生郡河南町前谷地字黒沢前7
TEL　0225（72）2111

印刷　株式会社　松弘堂
〒986　宮城県石巻市門脇字本草園2番16
TEL　0225（96）5555(代)